

市場価格と市場価値（四）

——価値法則論を中心として——

山本二三丸

第一節 価値法則の「定式化」について

第二節 「社会的必要労働時間」について

- 一、価値規定における「社会的必要労働時間」
- 二、市場価格規定における「社会的必要労働時間」
- 三、「社会的必要労働時間」の「技術説」的解釈

（以上、前号所載）

第三節 第三卷第十章におけるいわゆる「不明瞭な箇処」について

- 一、問題の箇処
- 二、需要供給と市場価値規定との関連についてのマルクスの説明
- 三、「不明瞭な箇処」の明確化について
- 四、問題の箇処についての「技術説」的解釈
- 五、「折衷説」的あるいは「需要供給説」の説明の一、二の例について

市場価格と市場価値（四）

（以上、本号所載）

第四節 「市場価値論」の位置づけについて（価値論における第一巻と第三巻との関連）

（以上、次号所載）

第三節 第三巻第十章におけるいわゆる「不明瞭な価値」について

一、問題の価値

さて、第二にわれわれが検討すべき問題は、「資本論」第三巻第二篇第十章「市場価値論」の中のいわゆる「不明瞭な価値」（または「曖昧な価値」）の意味である。

これらの価値がそもそも問題として取り上げられるにいたったのは、その内容が「不明瞭」または「曖昧」であつて簡単に捕捉されたいという理由によるものではなく、むしろ一般には、これらの価値のうちに、マルクスがこれまで第一巻において展開してきた価値理論にたいする一種の「訂正」が見出されるという事情に負うところが多かつたのである。すなわち、マルクスはこれまで商品の価値はそれにふくまれている「社会的必要労働時間」、あるいは、その生産に必要な「社会的必要労働時間」によって決定されるとなしていたのに、ここにいたって、価値決定要因を社会的需要にもとめる考え方に変わり、商品の価値は、その商品生産量が社会にとって必要であるかどうかという意味での「社会的必要労働時間」によって決定されるとなしている、というのである。かくして、マルクスの価値理論は、俗流経済学の考え方と「接近する」にいたった、「妥協した」、あるいは「屈伏した」と主張する、折衷的な、したがってまた改ざんの意図をもったマルクス「解釈論」がここに、絶好の「論拠」を求めたものである。さきに本稿

（註一）

において検討した迫間真治郎氏の所論は、この種の折衷的「解釈」によって強く動かされているものと見ることができ。もちろん、この種の折衷的「解釈」はそのまま一般に受け容れられることはなく、とくにマルクス経済学の基本的見地を貫ぬこうとする側から反駁がくり返されたのは当然である。のちに挙げる横山正彦氏の説明も、この反駁のために述べられたものとみることができ。しかし、卒直に言って、マルクス経済学の陣営の側からの論駁も、その多くのものが根本的な欠陥を蔵しており、適切なものはきわめて稀であつたといわなければならない。

(註) マルクス経済学にたいする俗流経済学の側からの「批判」あるいは「折衷」は、価値理論については、二つのものを挙げることができる。すなわち、そのひとつは、ここに述べたごとき、価値決定要因として社会的需要をマルクスが認めていたとなす説であり、他のひとつは、本稿第四節で考察されるところの、第一巻価値論と第三巻生産価格論との「矛盾」ないしは「理論的崩壊」を見出す説である。

われわれは、右のごとき、折衷的「解釈」論およびこれにたいするマルクス経済学の側からの論駁については、――横山氏の所論を一例として挙げるにとどめ――立ちいった検討を加えることをさしひかえるが、なによりもまず、右の折衷的ないしは改ざん的「解釈」の「論拠」として取り上げられる当該箇処そのものを、つぎに明示しておかなければならない。なお、以下の引用についてひと言付け加えておきたいのは、引用の順序がたんに掲載の便宜上、第三巻第二篇第十章において叙述されている順序によつたものであるということである。したがって、これら当該箇処について考究を加える場合の順序はこれとおのずから異ならざるをえないのである。

(1)「ただ異常な組合せのもとでのみ、最悪の条件下または最良の条件下で生産される商品が市場価値を規制す

るのであって、市場価値はまた市場価格の動搖の中心をなす——といつても、市場価格は同一種類の商品については同一である」(長谷部訳(9)——二六八ページ、ゴチック体——山本)

“Es sind nur ausserordentliche Kombinationen, unter deren die unter der schlechtesten Bedingungen oder die unter den bevorzugtesten Bedingungen produzierten Waren den Marktwert regeln, der seinerseits des Schwankungszentrum bildet für die Marktpreise——die aber dieselben sind für die Waren derselben Art.” (M.-E.-L. Institut, “Das Kapital”, Vol. III, S. 203 ただしゴチック体——山本)

(2) 「これに反し、需要が強くて、最惠の条件下で生産される商品の価値によって価格が規制されても需要が收縮しないような場合には、この商品が**市場価値**を規定する。そうしたことが生じうるのは、需要が普通の需要を要する場合、または、供給が普通の供給以下に減少する場合だけである。最後に、生産される商品の分量が、中位の市場価値で売れる以上に大きい場合には、最良の条件下で生産される商品が**市場価値**を規制する」。(訳(9)——二六八ページ、ゴチック体——山本)

“Ist dagegen die Nachfrage so stark, dass sie sich nicht kontrahiert, wenn der Preis geregelt wird durch den Wert der unter den schlechtesten Bedingungen produzierten Waren, so bestimmen diese den Marktwert. Es ist dies nur möglich, wenn die Nachfrage die gewöhnliche übersteigt, oder die Zufuhr unter die gewöhnliche fällt. Endlich, wenn die Masse der produzierten Waren grösser ist, als zu den mittlern Marktwerten Absatz findet, so regeln die unter den besten

Bedingungen produzierten Waren den Marktwert. ” (M.-E.-L. Vol. II, S. 204. ゴチック体——山本)

(3) 「需要が供給に比べて弱ければ、有利に生産される部分が——その多少にかかわらず——その価格を個別の価値にまで収縮することによって、のび延びてくる。市場価値は、供給が需要をはなだしく超過する場合を除けば、最良の条件のもとで生産される商品のこの個別的価値とは一致しえぬ」 (譯(9)——二七六ページ、ゴチック体——山本)。

“ Ist die Nachfrage schwach gegen die Zufuhr, so nimmt der günstig gestellte Teil, wie gross er immer sei, gewaltsam Raum ein durch Zusammenziehung seines Preises auf seinen individuellen Wert. Mit diesem individuellen Wert der unter den letzten Bedingungen produzierten Waren kann der Marktwert nie zusammenfallen, ausser bei sehr starken Ueberwiegen der Zufuhr über die Nachfrage ” (M.-E.-L. Vol. II, S. 210. ゴチック体——山本)

(4) 「そして第一の背離は、商品量が過小な場合には最悪の条件下で生産される商品がつねに市場価値を規制し、商品量が過大な場合には最良の条件下で生産される商品がつねに市場価値を規制するところであり、つまり、相異なる諸条件のもとで生産される諸分量間のたんなる比率からすれば別の結果が生ずるはずにもかかわらず両極端の一方が市場価値を規定するところとである」 (譯(9)——二七七ページ、ゴチック体——山本)。

“ Und die erste Abweichung ist, dass, wenn das Quantum zu klein, stets die unter den schlechtesten Bedingungen produzierte Ware den Marktwert reguliert, und wenn zu gross, stets die unter

den besten Bedingungen produzierte; dass also eins der Extreme den Marktwert bestimmt, trotzdem dass nach dem blossen Verhältnis der Massen, die unter den verschiedenen Bedingungen produziert sind, ein anders Resultat stattfinden müsste" (M.-E.-L. Vol. III, S. 211. ロヂツツ氏——山本)

ここに挙げた引用箇処は、そのいづれをとってみても、さきに述べた俗説の主張することく、商品の供給に比して商品にたいする需要が過大な場合にはいつでも市場価値そのものが騰貴し、その反対に商品にたいする需要に比してその供給が過大になればつねに市場価値そのものが低落するということを云いあらわしているようである。生産諸条件そのものに変化が生じなくとも、ただその商品について需要供給の關係に変化がありさえすれば、いいかえれば、需給の均衡關係が破れさえすれば、ただちにその結果として市場価値そのものに変化が生ずる、ということがこれらの箇処の中に確言されている、と考えられるのである。

だが、はたして、当のマルクスは、右のごとき、商品の需要供給關係による商品価値の規定を主張しているものであろうか？

われわれは、たんにマルクスの片言隻句を後生大事と引用し、これをなんとか『合理的に解釈する』ために不当な努力を払ってはならない。マルクスのいかなる言葉といえども、彼の理論體系において動かしがたい理論的(および論理的な)必然性をもって一定箇処に位置づけられているのであって、この必然的な理論的・論理的発展の筋道を科学的に辿ることをしようとはせず、勝手にわずかの辞句のみをとり出してこれだけをひねくりまわし、これを字義的に『解釈』したり、盲目的にうのみにし、これに追隨することをもって足れりとするのは、けっしてマルクス自身の

確立した科学的理論を正しく把握しようとする者の採るべき態度ではない(註)。

(註) このような消随式『解説』は、『資本論』にかんする雑多の入門書、解説書に共通の特徴となっている。すなわち、マルクスの述べた文章をそのまま云いかえて——難しい言葉を易しい言葉におきかえるだけで——ずらずらとどこまでもマルクスの字句通りに無限につづけられる式の『説明方法』である。だが、肝腎なのは、たとえば、第一卷第一章に何故に商品価値論が据えられていて、これと異なる問題にかんする章が冒頭に据えられていないか、等々といった事柄を明確にすることではなければならない。われわれがとらえなければならないのは、国語的解釈ではなくして、まさに理論体系の組み立てであるのである。理論体系の内面的関連を明確にし、全体的関連のもとに各章各節の敘述の内容がもつ意味を厳密に考究すべきなのである。ところが、このような理論についての全体的、科学的把握は、安直に『入門書』を製造する人々にとっては、とうてい手に負えないところであり、もっとも要領のよい『解説書』作成の唯一の手段として、辞句解釈のみに頼らざるをえない。要するに、マルクスの文章をそのまま易しい言葉におきかえるだけである。わたくしは、このような、辞典的解釈を広汎に適用する方法を簡単に『広辞林式解釈』と名付けるものであるが、この方法の普及は、歴史的には——いかながら今日でも流行しているが——「洋学輸入」の段階であり、『資本論』解釈の段階にのみふさわしいものである。今日、——とりわけ、経済学が社会主義経済学の段階にまで発展した時期においては、このような、ごまかしの『解説』の水準は早急に止揚されなければならない。

ここで、われわれは、右のマルクスの言葉の内容を科学的に判断するために、商品の需要供給とその市場価値との関係につき、マルクス自身がいかに論じているか、この問題にかんして彼の理論をまず整理してみることが緊要である。以下、われわれはまずこの点について、われわれの理解を深めかつ整理することによって、右の言葉の内容を判断しうべき根拠をつくり上げることしよう。

二、需要供給と市場価値規定との関連についてのマルクスの説明

さて、問題は、需要対供給、いいかえれば、商品にたいする社会的需要総量とその商品の供給総量との関係にある。ところで、需要と供給との一致を前提あるいは仮定するのは何故であるか？ ということについてはすでに前稿でふれるところがあったが、ここでは、問題はこれと異なって、需要供給の関係が市場価値の決定にとっていかなる意義をもちうるか？ それら両者の関連ないしは結びつきにある。だが、この両者の関連の問題をとり上げるにさいしては、まず、需要供給の一致と市場価値との関係について、マルクスが何と云っているかを、みなければならぬ。

(一)、「もし需要と供給とが一致 (sich decken) すれば、それらは作用しなくなり、またそれ故にこそ商品が市場価値通りに販売される。二つの力が反対の方向で均等に作用すれば、それらはたがいに止揚し、外部へはまったく作用しないのであって、この条件のもとで生ずる現象は、この二つの力の関与以外のものによって説明されねばならぬ。需要と供給とがたがいに止揚すれば、それらは何ものかを説明することをやめ、市場価値には影響しないのであって、なぜ市場価値はまさにこれこれの貨幣額で表現されて他の貨幣額では表現されないかにつきわれわれをまったく暗中に放置する」(インスティット版、第三卷、二一五ページ、譯(9)——二八二——二八三ページ、傍點——山本)。

(二)、「かようにして、市場価値から背離する諸市場価格は、その平均数からみれば、市場価値に均等化される、というのは、市場価値からの諸背離はプラスおよびマイナスとして止揚されるからである」(前出、二一六ページ、譯(9)——二八三——二八四ページ、傍點——山本)。

(三)、「だから需要と供給との関係は、一方では、市場価値からの市場価格の背離を説明するにすぎず、他方では、この背離の止揚・すなわち需要供給の関係の作用の止揚・への傾向を説明するにすぎない。需要と供給とは、

その不等によつてもたらされる作用をきわめて異なる形態で止揚しうる」(前出、三一六ページ、譯(9)——二八四ページ、傍點——山本)。

以上、三つの引用によつてあきらかに示されているように、需要と供給との關係は、なによりもまず、市場価値からの市場価格の乖離を説明するものにすぎない。市場価値そのものについては、なんら説明するところはないし、また、説明しうるものではない。しかも市場価値での販売、すなわち市場価値の実現は、需要と供給とが一致した場合、いいかえれば、需要と供給とが相殺し、相互に作用しなくなったときにはじめておこなわれるのである。このことをば、まず第一に確認しておくことが大切である。

では、つぎに、右の需要供給が社会的欲望とこれにたいする商品供給総量という形であらわれた場合、市場価値と市場価格との關係は、どのようなになるであろうか？ 社会的欲望が供給量を超過する場合には、市場価値そのものが騰貴するのではないか？ あるいは、その逆に、商品供給量が増大して社会的欲望量を超過する場合には、市場価値そのものが低落するのではなからうか？ これらの緊要な問題にたいして、マルクス自身は何と答えているであろうか？

(四)、「同一諸商品の市場価格が市場価値と一致して、それ以上の増大によつてもそれ以下の低下によつても市場価値から背離しないためには、相異なる販売者たちのたがいに加えあう圧迫が、社会的欲望の要求する分量の商品、すなわち社会が市場価値を支払いうるだけの商品量を市場に投ぜしめるに足りる大いさであることを要する。生産物の分量がこの欲望を超えるならば、商品は市場価値以下で販売されねばならぬであろう。逆に、生産物の分量が充分な大いさでない場合、または、同じことであるが、販売者間の競争の圧迫が彼らをしてよぎなくこの商品分量

を市場に出さしめるに足りるだけ強大でない場合には、商品、市場価値以上で販売されるであろう。市場価値が変動すれば、総商品分量の販売されうる諸条件も変動するであろう。市場価値が低下すれば、平均的には社会的慾望(ここではつねに支払能力ある慾望のこと)が増大して、特定の限界内ではより多量の商品が吸収しうる。市場価値が増大すれば、商品にたいする社会的慾望が収縮して、より少量の商品が吸収される。だから、需要供給が市場価格を——あるいはむしろ市場価値からの市場価格の背離を——規制するとすれば、他面、市場価値は需要供給の關係を、または、それをめぐって需要供給の変動が市場価格を動搖させる中心を、規制する」(インスティットゥ版第三卷、二〇六ページ、長谷部譯(9)——二七一—二七二ページ、傍點——山本)。

(五)、「各個の財貨、または、ある商品種類の各一定分量は、その生産に必要な社会的労働しか含まないかもしれないが、そしてこの側面から考察すればこの商品種類全体の市場価値は、必要労働だけを表示するのだが、しかも、この一定商品が当時の社会的慾望を超過する程度に生産されたとすれば、社会的労働時間の一部分が浪費されたのであって、その場合にはこの商品分量は、市場では、現実にそれが含むよりもはるかに少量の社会的労働を代表する。だからこれらの商品は市場価値以下で売りとはされねばならず、その一部分はまったく売れなくなることもある。——一定の商品種類の生産に費やされる社会的労働の範圍が、この生産物によって充たされるべき特殊な社会的慾望の範圍にとつて過小である場合には、この逆である。——だが、一定財貨の生産に費やされる社会的労働の範圍が、充たされるべき社会的慾望の範圍に照応するならば、したがって生産される商品分量が、不變的需要のもとでの再生産の普通の基準に照応するならば、商品は市場価値どおり販売される」(前出、二二三ページ、譯

右の二つの引用によつて疑う余地なく論証されていることは、社会的欲望と供給との關係なるものは、市場価値そのものの決定の上にはなんらの影響をもおよぼしえないこと、それは、たんに、市場価格の市場価値からの背離を、すなわち、市場価格が市場価値より以上に、またはそれ以下に変動することを証明するだけであるということ、である。この場合、市場価値がその商品の「生産に必要な社会的労働」をそのままあらわしたものであることは、いうまでもないことである。それは、要するに、市場に出される以前にその生産部面においてどれだけの社会的必要労働を吸収したかという問題である。これにたいして、その商品が市場において販売される場合の問題、いいかえれば、その商品がいくばくの貨幣と交換されうるか、市場価値実現の問題こそ、市場価格の問題なのであって、また、この市場価格の問題の場合にのみ、はじめて需要供給の關係、いいかえれば、社会的欲望と供給量との關係が決定的に重要な役割を演ずることになるのである。

このようにして、市場価値決定と、市場価格決定との両者の相違、したがつてまた、これら両者の決定に参与するそれぞれの諸要因は、嚴密に識別され、明確に把握されるべきであつて、輕々しく混同されるべきではない。上に挙げたマルクスの文章は、このことを疑う余地なく明示しているものである。

なお、念のために、われわれは、市場価値および市場価格決定にかんする右のごとき諸事情を明確に断定しているマルクスの文章をつぎに一、二挙げておこう。

(六)、「市場にある商品、量的大いさとその市場価値との間には必然的關連はない。けだし、たとえば、ある商品はとくに高い価値を有するが他の商品はとくに低い価値を有し、したがつて、ある与えられた価値額がきわめて少量の一方の商品ときわめて多量の他方の商品とであらわされうからである。市場にある財貨の分量とこの財貨の

市場価値との間にはつぎのような関連があるだけである。労働の生産性の与えられた基礎では、どの特殊の生産部面でも、一定分量の財貨を生産するには一定分量の社会的労働時間を要する、といってもこの比率は、生産部面を異にすればまったく相異し、またこの財貨の有用性またはその使用価値の特殊性とはなんらの内的関連もないのだが。他のすべての事情を不変として、ある商品種類の a 量が b 労働時間を要費するならば、 na 量は $n \cdot b$ 労働時間を要費する。さらに、社会が慾望を充たし、この目的である財貨を生産しようとするかぎりでは、社会はこれに支払をせねばならぬ。事実上では、商品生産のもとでは分業が前提されているのであるから、社会はこの財貨を、社会が自由に処分しうる労働時間の一部分をこの財貨の生産に費やすことによって購うのであり、したがって、この与えられた社会が自由にしうる労働時間の一定分量によってこの財貨を購うのである。社会のうち、分業によってこの一定の財貨の生産に自己の労働を費やすことになる部分は、自己の慾望を充たす財貨で表示される社会的労働によって等価を受けとらねばならぬ。ところが、一方では、ある社会的財貨に費やされる社会的労働の総分量、すなわち社会がその総労働力のうちこの財貨の生産に費やす可除部分、つまりこの財貨の生産が総生産中で占める範囲と、他方では、社会からの一定の財貨によって充たされる慾望の充足を要求する範囲との間には、必然的関連はなく、偶然的な関連があるだけである」(前出、二二—二二三ページ、譯⑨——二七九—二八〇ページ、傍點——山本)。

(七)、「一商品がその市場価値で、——すなわちその商品に含まれる社会的必要労働に比例して——販売されるためには、この商品種類の総量に費やされる社会的労働の総量が、この商品にたいする社会的慾望すなわち支払能力ある社会的慾望の量に照応しなければならぬ。競争は、市場価格の動搖は——これは需要供給の比率の動搖に照応する——たえず、各商品種類に費やされる労働の総量を右の程度に減少させようとする」(前出、二一九ページ、譯

三、「不明瞭な箇処」の明確化について

以上により、需要供給、いかえれば社会的慾望量と商品供給量との相互關係によって、いかに市場価格が決定されるかということ、および、この關係によつては、市場価値そのものの決定はけつして直接的に影響をこうむるものでないことが、——マルクス自身の言葉によつて——あきらかにされた。だが、右に述べたことは、マルクスの明白な指摘をまつまでもなく、その価値論に照らしてみても、また当然すぎるくらい当然のことであつたのである。

そこで、以上あきらかにされたところをもつて、さきに挙げた四つの「不明瞭な箇処」について必要な検討を加へることにしよう。

(1)、第一の箇処について

まず、さきに挙げた(1)についてみよう。この(1)の箇所を充分正しく理解するためには、この(1)の箇処が置かれてゐる「位置」について、とりわけ、この箇処に先きだつておかれてゐるつぎの文章にたいして、充分な注意がはらわなければならぬ。

「ついでさらに、つねに市場価値——これについては後述——が、相異なる生産者によって生産される個々の商品の個別的価値から區別されねばならぬであらう。若干のかかる商品の個別的価値は市場価値以下であり(すなわちその生産のためには、市場価値が表現するよりもわずかの労働時間しか要しない)、他のそれは市場価値以上であらう。市場価値は、一面では、ある部面で生産される商品の平均価値とみなされるべきであり、他面では、その部

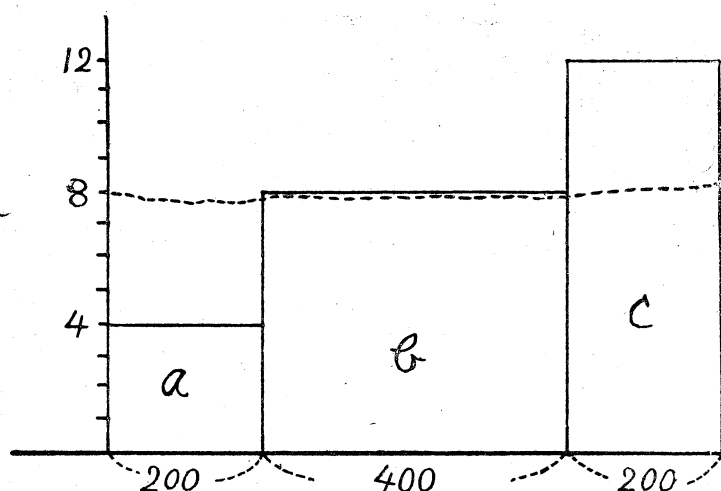
面の平均的諸条件のもとで生産されてその部面の生産物の大量をなす商品の個別的価値とみなされるべきである」（前出、二〇三ページ、譯⑨——二六七ページ、傍點——マルクス）。

見られるとおり、マルクスは、市場価値の説明に入るにさきだって、市場価値と個別的価値との差違にふれ、市場価値とは、「平均価値」または、「平均的諸条件のもとで生産されてその部面の生産物の大量をなす商品の個別的価値」とみなすことができる述べているのであって、問題の（1）の箇處は、右の「平均的価値」あるいは「平均的條件」にたいする「但し書」とみなされるべきものである。したがって、この「但し書」の内容は、もちろん、「後述」の市場価値の説明の中に見出されるものでなくてはならない。

では、個別的価値との対比における市場価値については、マルクスは、どのように説明しているであろうか？

マルクスは、「個々の商品の価値にとって妥当する諸条件が、ここでは、ある商品種類の総額の価値にとっての諸条件として再生産される」（前出、二〇六ページ、譯⑨——二七二ページ）と述べ、「市場にある一部面全体の生産物をなす商品の大量」につぎのように「適用」して、市場価値を考察しているのである。

「商品大量——さしあたり一つの生産部門の商品大量——の全体を一つの商品とみて、多数の同一諸商品の諸価格の総額を一つの価格に合計されたものとみれば、事態がもっとも容易に叙述される。その場合には、個々の商品について語られたことが、いまや文字どおりに、市場にある一定生産部門の商品大量にあてはまる、商品の個別的価値は社会的価値に一致するということが、いまや、総分量はその生産に必要な社会的労働を含むという、および、この大量の価値は市場価値に等しいというところまで、現実化されている、——あるいは一步すすんで規定されてくる」（前出、二〇七—二〇八ページ、譯⑨——二七三ページ）。



ここには、さきの個別的商品の価値規定の場合における「社会的必要労働時間」が「商品大量」についての市場価値規定における「社会的必要労働時間」という、より現実的な関係においてあらわされているのであって、かくしてさきの「社会的必要労働時間」は、ここにあつてはより現実的な規定を受けたものとなっているのである。だが、われわれは、この点についての立ちいった論究はさしあたり本稿においてさしひかえることとし、「商品大量」の市場価値規定が、種々の「組合せ」のもとにいかにおこなわれるか、ということ、マルクスにしたがってみておかなければならない。

マルクスが挙げているのは、三つの「組合せ」である。(註)

(註)「組合せ」とはそもそもいかなることを意味するか、また、何故に「組合せ」が問題となるか、ということとは、市場価値そのものの内容と不可分の関係にある。この「組合せ」の意義、その内容については、本稿次節において立ち入った考究がおこなわれる。ここでは、とりあえず、第三節の説明にとって必要なかぎりにおいて、次節でおこなわれるべき論究の中からあらかじめ、上のごとき簡単な「図解」を取り出して示しておく。

(備考) — a, b, c はそれぞれ異った生産諸条件のもとで生産される同一種類の商品を示す。a は上位の条件、b は中位の条件、c は下位の条件のもとに生産されるもので、縦の高さは a, b および c の各個別の商品価値量を、横の中は a, b および c の各生産量を示す。(単位は任意の数値を与えることができる。たとえば、価値量は、四労働時間、あるいは四労働日、生産量は、二〇〇個あるいは二〇〇万個というように)。

この図において、生産総量は、たとえば八〇〇万個であり、そのうち a, b および c が占める各割合は、それぞれ、二五%、五〇% および 二五% となっている。この場合には、b が「商品の大量」を構成するものになっている。このように、同一商品を生産しながらそれぞれ生産諸条件を異にし、したがってそれぞれ個別的価値を異にする、a, b および c が、生産総量の上でそれぞれいくばくの割合を占めるかということが、「組合せ」の問題であり、この「組合せ」のいかんによって市場価値が決定されるのである。右の図解においては、市場価値は、「商品の大量」を占める b によって決定され、したがって、b の個別的価値 (右の図では八労働時間) に一致する。(点線をもって示したのが市場価値の高さである)。

第一の「組合せ」は、「これらの商品の大量がほぼ同一の標準的な社会的条件のもとで生産されていて、この価値は同時にこの大量をなす個々の商品の個別的な価値である」場合である。(前掲註記の場合は、この第一の「組合せ」の一つの例である)。この「第一の場合」について、マルクスは、つぎのように述べている。

「いまもし、比較的小さい一部分はこの条件以下、他の一部分はこの条件以上で生産され、したがって、一方の部分の個別的価値は大部分の商品の中位的価値よりも大きく他方の部分のそれはより小さいが、しかもこの両極端が均衡し、したがって両極端に属する商品の平均価値は中位的大量に属する商品の価値に等しいとすれば、市場価値は、中位的条件のもとで生産される商品の価値によって規定される。総商品大量の価値は、すべての個別的諸商品——中位的条件のもとで生産された諸商品、ならびに、それ以下または以上の条件のもとで生産された諸商品——

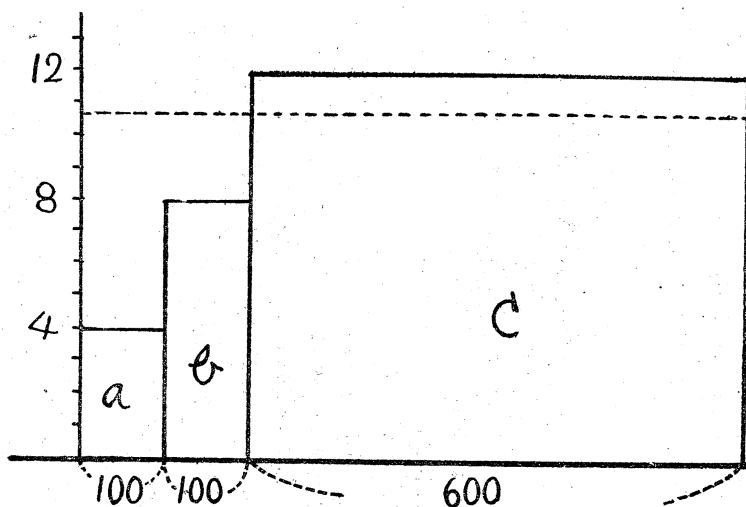
をいっしよにしたものの価値の現実的総額に等しい。この場合には、商品大量の市場価値または社会的価値——商品大量中に必然的に含まれる労働時間——は、中位的大量の価値によって規定されている」(前出、二〇八ページ、譯(9)一七三—二七四ページ)。

すなわち、「中位的条件」が「商品的大量」を占める第一の「組合せ」の場合にあっては、商品大量の市場価値または社会的価値は、^(註)中位的、大量の個別的価値によって決定されるのである。

(註) ここでは、「市場価値」と「社会的価値」という二つの言葉は、同じ意味をもつものとして並べられているが、しかし、この両語はまったく同一の内容をば異って表現したものにすぎないのだというように考えてはならぬ。とりわけ「社会的価値」という言葉は、たとえば「価値」という言葉がそうであるのとまったく同じように、その内容がきわめて「簡単なもの」からじまって「複雑・高度なもの」に「発展」あるいは「展開」しているものなのである。したがって、それが「市場価値」という言葉の示すものと同じ内容をもつにいたるのは、——あるいは、より厳密にいいあらわせば、「社会的価値」が「市場価値」として「展開」されるようになるのは——商品生産の諸条件が一定の段階にまで発展をとげた場合においてである。「社会的価値」という言葉そのものに惹かれて、その意味する内容の「弁証法的発展」関係をとらえようとしなのは、これまでのこの国における価値論研究の根本的欠陥の一つであったのであるが、このことは、たとえば、さきに挙げた横山氏の所論の中にも見られるごとく、価値と「市場価値」との直接的同一視という点にあきらかにあらわれている。だが、これらの点についての検討は、本稿第四節にゆずることにしよう。

第二の「組合せ」の場合については、つぎのように述べられている。

「これに反し、市場に出される問題の商品の総分量は同一不変であるが、劣悪な条件のもとで生産される商品の価値が優良な条件のもとで生産される商品の価値と均衡せず、したがって、劣悪な条件のもとで生産される商品部分

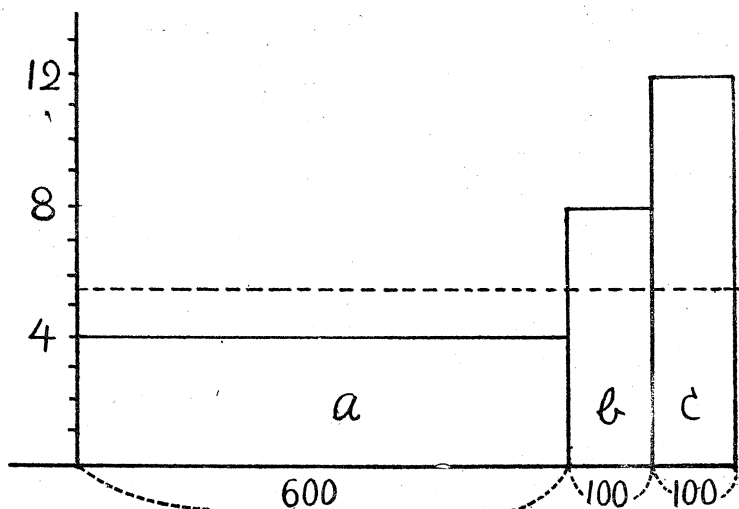


が中位的分量に比しても他方の極端に比しても相対的に大きいと仮定しよう。その場合には、劣悪な条件のもとで生産される商品大量が、市場価値または社会的価値を規制する」(前出、二〇八ページ、譯(9)一七四ページ)。

「劣悪な条件」のもとで生産される商品部分——(さきに掲げた図解についていえば、cに当るもの)——が相対的に大きいという「組合せ」の「第二の場合」においては、市場価値または社会的価値は、この「劣悪な条件」のもとで生産される商品大量によって規制される。さきの例にならって、この「第二の場合」を图示すれば上のごとくである。(点線は、市場価値の高さを示す)。

第三の「組合せ」の場合。

「最後に、中位よりも優良な条件のもとで生産される商品分量が、劣悪な条件のもとで生産される商品分量をいちじるしく超過し、中立的事情のもとで生産される商品分量に比してもいちじるしく大きいと仮定しよう。その場合には、最良の条件のもとで生産される部分が市場価値を規制する。ここでは市場の充溢を度外視するが、市場充溢の場合には、つねに、最良の条件のもとで生



産される部分が市場価格を規制する、だが、ここでわれわれが問題とするのは、市場価格——市場価値と異なるかぎりでの——ではなく、市場価値そのものの種々の規定である」(前出、二〇八一—二〇九ページ、譯(9)——二七四ページ、傍點——山本)。

「優良な条件」のもとで生産される商品分量が相対的に大きいという「組合せ」になっている「第三の場合」においては、市場価値または社会的価値は、この「優良な条件」のもとで生産される商品大量によって規制される。これを図示すれば、上のごとくなるであろう。(点線は、市場価値の高さを示す)。

ここで注意すべきは、マルクスが右の「第三の組合せ」にかんして、「市場充溢の場合」を挙げ、これについて簡単な註記を加えている点である。すなわち、「市場充溢」、いいかえれば、「商品の市場への供給量が過大である場合」には、市場価格がつねに「最良の条件」のもとで生産される部分によって規制されるということ、このように市場価格の決定については、「市場充溢」が、すなわち商品の需要供給が決定的に重要な意義をもつが、しかし、市場価値の決定にとつては需要供給は決定的な意義をもちえないということ、

ここで問題なのは市場価格ではなくして市場価値であり、市場価値の決定にとって決定的意義をもつものは、商品の需給関係ではなくして、「組合せ」そのものであり、したがってまた生産における諸条件にはかならないということ、——これらのことがここに簡潔に記されているのであって、この附言は、当面の問題の理解にとってきわめて重要な意味をもっているのである。(ただし、ここではこの点について敷衍することをさけ、立ちいった論究は行論にゆずることにしよう)。

以上、三つの「組合せ」につき、それぞれの場合に市場価値がいかに規制されるかということを中心として把握するならば、問題の(1)の箇処における「市場価値」という言葉が、いかなる意味において妥当であるか、ということは明白となるであろう。すなわち、この(1)の箇処においては、この箇処に先き立つ文章の中で述べられているところの、「平均的条件」のもとで生産される商品が大量を占める第一の「組合せ」にたいして、これと異なる「組合せ」、いいかえれば、「劣悪な条件」のもとで生産される商品大量が相対的に大きい第二の「組合せ」と、「優良な条件」のもとで生産される商品大量が相対的に大きい第三の「組合せ」とを挙げ、これら第二および第三の「組合せ」にあつては市場価値がそれぞれ、「劣悪な条件」および「優良な条件」のもとで生産される商品大量によって規制される、ということが述べられているのである。^(註)「異常な組合せ」(ausserordentliche Kombinationen)とは、実に、右の二とき第二および第三の「組合せ」を指して云つたものにはかならないのである。

(註)「資本論」第三卷第十章においては、この問題の(1)の箇処について特別剰余価値の実現についての簡単な指摘があり、行を改めてマルクスは、つぎのように述べている。

「最悪の条件下で生産される商品の販売は、需要を充たすためにはその商品が必要であることを証明する、と云つてもなんの役

にも立たない。想定されたこの場合に価格が中位の市場価値よりも騰貴したとすれば、需要は減少したであろう」(前出、二〇四ページ、譯(9)——二六八ページ)。

マルクスは、さきに説明したように、「最悪の条件」のもとで生産される商品大量について市場価値が、第二の「組合せ」により、いかに決定されるかを後段において敘述する心組みで、その敘述に先きだち、まず、需要が強くて「最悪の条件」下の商品が売れさえすれば——その場合の「組合せ」がどうあろうとも——そのときにはいつでもこの「最悪の条件」下で生産された商品によって市場価値が決定されるのだと主張するところの謬論にたいして、一言注意をあたえているのである。すなわち、「最悪の条件」下で生産された商品が現実売れているのであるから、需要を充たすためにはそれらの商品は必要であり、それらの商品の価値が市場価値を決定するのだという議論は、およそ役に立たない。何故に役立たないかといえば、この想定された場合には、価格が中位の市場価値よりも騰貴したとすれば、需要もそれに応じて減少してしまい、「需要を充たすために必要だ」などということはできなくなるからである、というのである。これにつづいてマルクス自身が説明しているように、商品の販売量は、特定の価格——その一定の高さ——に結びつき、前者は後者によって制約されているのであって、価値が変動すれば、商品の販売量も変動せざるをえないのである。

ところで、日本語訳者長谷部氏は、右に挙げたマルクスの文章のうち、「供給」という言葉を「需要」におきかえ、「減少」を「増加」にかえ、——カウツキー版の言葉をそのまま採用し(カウツキー版、第三卷第一分冊、一四二ページ)——インステイトウト版の施した訂正はむしろ「恣意的な改変」であって、それが誤りであることはマルクスの「以下の敘述によっても明白であろう」と訳註を加えられている。(譯(9)——二六九ページ、なお、日本評論社版長谷部譯は、第九分冊——七三—七四ページ)。

だが、さきに述べたごとく、長谷部氏のこのような『訂正』こそ、まさに「恣意的な改変」といふべきである。このことは、上記のマルクスの説明方法を考察しただけでも明らかであると思われるのであるが、なお、長谷部氏自身がその『訂正』の主旨を説明されているつぎの所論を一読することによって、長谷部氏による『訂正』の論拠なるものを知ることができる。同時に、その『論拠』がいかに「恣意的」なものであるかということを容易に理解されるであろう。——曰く、「ここでマルクスは、価格が騰貴すれば需要が減少する、などということを論じているのではない。ここでの問題は「最悪の条件下……で

生産された商品が市場価値……を規制する』ところの『異常な組合せ』すなわち『需要が普通の程度を凌駕する場合』の説明である(『日本評論社版、前出、七四ページ、傍点——長谷部氏のもの』)と。(訳註のこの部分は、日本評論社版訳本のみに掲げられていて、青木文庫版訳本では省かれている。だが、後者でこの部分が除かれているからといって、訳者の所論が改められたとみるべきではなく、むしろ、訳者による『訂正』および『訂正の主旨』は依然として堅持されているところからみて、右の所論を貫く訳者の考え方はまったく変りないものと見なければならぬ。たとえば、研究所大衆版はカウツキーによる改ざんを訂正することをもってその主要な課題としており、その「序文」におけると同様、第三卷への「編集まえがき」においてもカウツキーの改ざんを指摘しているのにたいし、長谷部氏はことさら、研究所の「訂正は誤りである」という訳註を挿入していられるのである(譯(8)——一ページ参照)。

右の長谷部氏の所論のうち、その前半、すなわち、「マルクスは価格が騰貴すれば需要が減少する、などということ論じているのではない」という、氏の指摘は、むしろ、氏自身、マルクスの文章の内容、とくに「役に立たない」(Es hilft nicht zu sagen)という言葉の意味をまったく解しえられないことを示しているものであって、見当はずれの議論といわざるをえない。さらに、その後半、すなわち、「異常な組合せ」の『説明』にいたっては、その根本的誤謬は疑う余地がない。なぜならば、「異常な組合せ」とは、さきに、くりかえし説明したごとく、第二および第三の「組合せ」の場合であって、これらの「組合せ」にあつては、「需要」のごときはまったく問題となりえないからである。また、長谷部氏がこの「異常な組合せ」をもって「需要が普通の程度を凌駕する場合」となしていられるのは、氏自身、需要が過大になれば——生産条件にはいささかの変化なくとも——市場価値そのものの決定に変化をきたし、「最悪の条件」下で生産された商品が市場価値を規制するのだという、まさにマルクスによって論駁され批判されている当の謬論に追隨していられることをば、端的に示しているのである。

(2) 第二の箇処について

第一の箇処については、以上のごとく、「組合せ」の内容を正しくとらえることによって、マルクスが「市場価値

を規制する」と述べたことの意味を正當に理解することができるのであるが、しかれば、第二の箇處については、どうであらうか？

(2) の箇處は、さきの註で挙げたマルクスの文章——「最悪の条件下で生産された商品の販売は、……需要は減少したであらう。」——につづいて、これと同じパラグラフの中で述べられているものである。すなわち、「最悪の条件」下で生産される商品が売れたからといって、それが市場価値を決定することにはならない、価格が中位の市場価値より高くなれば、需要そのものが減少してしまうのであって、供給と商品取引高との間には緊密な関連があり、価格が変動しても取引高が「同一不変」、いいかえれば、生産＝供給総量が「取引」されて、それに「変化」が生じないのは、「ただ、より高い価格がより低い商品分量と」、「より低い価格がより大きな商品分量と」一致する場合だけだ、と述べている。(2) の箇處は、以上に直ぐつづいて述べられているものである。

(2) では、あきらかに問題は、需要供給の關係と市場価値および市場価格との関連である。したがって、ここにおいて、われわれがまず想起しなければならないのは、この種の問題にかんして、さきにあらかじめ要約しておいたところである。すなわち、需要と供給との關係は、たんに「市場価値からの市場価格の諸背離を説明するにすぎない」のであり、市場における商品の量とその市場価値との間にはなんら必然的な関連はない、ということである。なお、当面の問題の考察および判断にかんして、とくに重要な示唆を与えるものとして、さきに挙げた(四)および(五)の引用の中から、つぎのごときマルクス自身の言葉を摘記しておくことは、このさい適切であると考えられる。

(引用(四)より)

「生産物の分量がこの慾望〔社会的慾望——山本〕を超えるならば、商品は市場価値以下で販売されねばならぬであらう。逆に生産物の分量が充分な大いさでない場合、または同じことであるが、販売者間の競争の圧迫が彼らをし

てよぎなくこの商品分量を市場に出させるに足りるだけ強大でない場合には、商品は市場価値以上で販売されるであらう」（傍点—山本）。

（引用（五）より）

「この一定商品が当時の社会的慾望を超過する程度に生産されたとすれば、……これらの商品は市場価値以下で売りとばされねばならず、その一部分はまったく売れなくなることもありうる。——一定の商品種類の生産に費やされる社会的労働の範囲が、この生産物によって充足されるべき特殊的な社会的慾望の範囲にとって過少である場合には、この逆である」（傍点—山本）。

なお、念のために、さきに挙げた第三の「組合せ」についてマルクスが附言していたところをつぎに引いておこう。

「ここでは市場の充溢（*Ueberführung des Marktes*）を度外視するが、市場充溢の場合には、つねに、最良の条件のもとで生産される部分が市場価格を規制する」（傍点—山本）。

以上、くりかえしおこなわれた説明ならびに引用を正しくとらえることによって、問題の（2）の箇処の中の「市場価値」という言葉が、当然、「市場価格」という言葉によっておきかえられなければならない、ということとは明白となるであらう。原文において「市場価値」とあるのは、「市場価格」の誤記と見なされるべきである。このようにして、その内容に照らして（2）の箇処に「訂正」を施すならば、つぎのごとくなるであらう。

「これに反し、需要が強くて、最悪の条件下で生産される商品の価値によって価格が規制されても需要が収縮しないような場合には、この商品が市場価格を規定する。こうしたことが生じるのは、需要が普通の需要をこえる場合、または、供給が普通の供給以下に減少する場合だけである。最後に、生産される商品の分量が、中位の市場価

値で売れる以上に大きい場合には、最良の条件下で生産される商品が**市場価格**を規制する」(ゴチック体—山本)。

このように「市場価値」という言葉のかわりに「市場価格」という言葉を据えることによって、はじめて、需要供給の關係と、市場価値および市場価格の運動にかんするマルクスの理論は本来の一貫性を保持しうるものとなると考えられる。また、これを当該箇処にかぎってみた場合にも、「市場価格」という言葉におきかえることによって、(2)の箇処の置かれてゐる前後の脈絡も一貫したものとなり、理路整然たるものとなりうるのである。

(3)、第三の箇処について

第二の箇処について、右のごとく、「市場価値」の「市場価格」への書きかえがおこなわれるべきであるとすれば、これにつづく問題の(3)の箇処についても、(2)の場合と同じ意味における「訂正」は免れがたいものと考えねばならない。この(3)の箇処は、さきに挙げた第三の「組合せ」についてマルクスが附論している一節の中に見出されるものであって、この箇処のすぐ前には、つぎのような説明が置かれてゐるのである。

「最後に、第三の場合のように、有利な極端で生産される商品分量が他方の極端のものにくらべてばかりでなく中位的条件のものにくらべても多量ならば、市場価値は中位的価値以下に低下する。両極端と中位との価値総額の加算によって計算される平均価値は、この場合には中位の価値以下であつて、有利な極端が占める相對量に應じて中位の価値に近づいたり遠ざかったりする」(前出、二一〇ページ、譯(9)―二七六ページ)。

それゆゑに、「需要が供給にくらべて弱ければ」、「有利に生産される部分」が「のさばつてゐる」。また、「供給が需要をはなだしく超過する場合を除けば」、市場価格は、「最良の条件のもとで生産される商品のこの個別的価値に

「一致することはできない」のである。このようにして、(3)の箇処において「市場価値」とある言葉は、当然、「市場価格」という言葉に置きかえられるべきである。なぜならば、ここでは、需要供給の關係によつて、市場価格が個別的価値と一致するか否かが説明されているからである。ここに述べられていることは、くりかえして云うならば、「供給が需要をはなだしく超過する場合」には、市場価格は、最良の条件下で生産される商品の個別的価値と一致する、ということになるのであって、これは、いうまでもなく、自明のことに属する。このことは、また、さきに重ねて引用しておいたところの、「市場充溢の場合」にかんするマルクスの言葉——「市場充溢の場合には、つねに、最良の条件のもとで生産される商品の個別的価値が市場価格を規制する」（傍點——山本）——と比較対照することによって、疑う余地なく論証されうる。「市場充溢」とは、まさしく「供給が需要をはなだしく超過する場合」には、かならないのである。反対にまた、もし、「市場価値」という言葉をそのままにしておくならば、およそつぎのようになるであらう、——すなわち、「供給が需要をはなだしく超過する場合には、市場価値は最良の条件下で生産される商品の個別的価値に一致するし、供給が需要をはなだしく超過しない場合には、市場価値は最良の条件下で生産される商品の個別的価値と一致しない」と。これでは、市場価値は、「組合せ」によって決定されるどころか、まったく需要供給の關係によつて規定されることになってしまふのであって、さきに説明した市場価値の規定にかんするマルクスの主張とは完全に相容れないものになってしまうのである。

そこで、(3)の箇処について、「市場価値」を「市場価格」に「訂正」するならば、つぎのごとくなるのである。「需要が供給にくらべて弱ければ、有利に生産される部分が——その多少にかかわらず——その価格を個別的価値にまで収縮することによつて、のさばってくる。市場価格は、供給が需要をはなだしく超過する場合を除けば、

最良の条件のもとで生産される商品のこの個別的価値とは一致しえなう」(註)(ゴチック体—山本)。

(註)この(3)の箇処は、見られるとおり、「需要が供給にくらべて弱い」場合における市場価格の規定を論じたものであるが、これに対応するものとしては、「需要が供給を超過する」場合が、当然取扱われなければならない。「需要が供給にくらべて弱い」場合に「有利に生産される商品の個別的価値」が市場価格を規制するとすれば、「需要が供給を超過する」場合には「不利に生産される商品の個別的価値」が、当然、市場価格を規制する。それゆえ、マルクスは、(3)の箇処が置かれて一節に先きだっておかれたパラグラフの最後において、つぎのように述べているのである。

「需要が僅かでも超過すれば、不利に生産される商品の個別的価値が市場価格を規制する」(前出、二一〇ページ、譯(9)二七六ページ、ゴチック体—山本)。

それゆえ、もし、(3)の箇処の「市場価値」という言葉をそのままにしておくならば、たとえ表面的かつ局部的にせよ、論理的に一貫性にいささかなりとも関心をほらう理論家は、右に掲げたマルクスの文章の中に見出される「市場価格 (Marktpreis)」という言葉は「市場価値 (Marktwert)」という言葉に置きかえざるをえないであろう。一九四九年マルクス・エンゲルス・レーニン研究所より出版されたロシア訳「資本論」は、ステュエバノフ・スクヴォルツォフのロシア語版(一九二〇年)にマルクスの手稿その他の典拠を参照して必要な訂正を加えて成ったものであるが、このロシア語版においては、(3)の箇処の「市場価値 (рыночная стоимость)」がそのままであるのは——かりに一步譲って——止むをえないとしても、右に掲げたマルクスの文章の中の「市場価格」という言葉までが「市場価値」という言葉に置きかえられているのである。

「Если при этом спрос преобладает хотя бы незначительно, то рыночную стоимость регулирует индивидуальная стоимость товаров, произведённых при наименее благоприятных условиях» (И.И. СТЕПАНОВА-СКВОРЦОВА, проверенный и исправленный И.И.МЭД, «КАПИТАЛ», том III, с. 191. (傍線—山本))

エンゲルス版においても、また、同じマルクス・エンゲルス・レーニン研究所の手に成る大衆版「資本論」(いわゆるアドラツキー版および一九五三年発行のデイツ版)においても、この「市場価格 (Marktpreis)」という言葉が見出されるのであるからして、右のロシア語版における「訂正」は、おそらく、マルクスの手稿によるものか、あるいは、さきに述べたとき『論理的「一貫性」の必要にもつづいたものとしか考えられない。マルクスの手稿によって「訂正」がおこなわれたのであれ

ば、当然、その旨の「断わり書き」が必要であるし、さらに、その手稿をそのまま採用した理論的根拠を説明すべきであろう。だが、たとえば、マルクスの手稿によるにせよ、あるいはよらないにせよ、かかる「訂正」は、市場価格および市場価値の規定にかんするマルクスの理論の見地よりすれば、むしろ「改悪」と称すべきものである。ことに、たんにこの箇処のみに、無断で「訂正」を施し、同じ問題を含む他の箇処については、エンゲルス版、研究所大衆版をそのまま踏襲している点は、眞に論理的な一貫性をとようとぶものの探るべきことではないように思われる。このような問題は、おそらく、研究所大衆版が完全に手を加えられた瞬に解決されるのではなからうか。

(4) 第四の箇処について

では、最後に、第四の箇処については、どうであろうか？

(4) の箇処については、たんにそれが置かれているバラグラフ全体の意味を正しくとらえることだけで、その可否を判断するには充分であると考えられる。さきに述べたごとく、マルクスは、商品の市場価値そのものの規定について三つの「組合せ」の場合を考え、そのそれぞれについて立入った考察を加えたのちに、かくして決定された市場価値が市場においていかに実現されるかということ、いいかえれば、「市場価値からの市場価格の背離」の問題を考究しているのである。市場価値そのものの決定についてはなんら関与するところのなかった需要供給の關係、すなわち「社会的慾望量」の問題は、この段階にいたって、いいかえれば、市場価格の決定の問題が取り上げられるにおよんではじめて、考察の対象となるにいたったのであって、しかも、それが考察の対象となるに至った所以は、一にかかって、それが「市場価格の市場価値からの諸背離(Abweichungen)」を説明する要因であるにすぎないからなのである。

右の(4)の箇処に先き立って、マルクスは、つぎのように述べている。

「さて、この「商品の—山本」分量にたいする需要も普通の需要ならば、商品はその市場価値で——この市場価値が前述の三つの場合のどれによって規制されるにせよ——販売される。この商品分量はある欲望を充たすばかりでなく、これを社会的規模で充たす。これに反して、この分量が需要よりも小さいか大きい場合には、市場価値から、市場価格の背離が生ずる。」(前出、二一〇—二二一ページ、訳⑨—二七七ページ、傍点—山本)。

うたがいもなく、問題の中心は、市場価値からの市場価格の「背離」の上に置かれている。そして、市場価値そのものについていえば、すでにみたごとく、前述の三つの「組合せ」のいかんによって規制されているのである。(4)の箇処における「市場価値」という言葉が、当然、「市場価格」におきかえられなければならぬことは、疑う余地がない。

それゆえ、「第一の背離は」という言葉をもってはじまる(4)の箇処について、右のごとき「訂正」を施すならば、つぎのごとき文章が得られるであろう。

「そして第一の背離は、商品量が過小な場合には最悪の条件下で生産される商品がつねに市場価格を規制し、商品量が過大な場合には最良の条件下で生産される商品がつねに市場価格を規制するということであり、つまり、相異なる諸条件のもとで生産される諸分量間のたんなる比率からすれば別の結果が生ずるにもかかわらず両極端の一方が市場価格を規定するということである」(ゴチック体—山本)。

なお、この「訂正」にかんしては、さきに(2)の箇処について問題を検討したさいに引用された(四)および(五)よりの抜萃(本稿八一—八二ページ参照)をあわせ考察すべきである。さすれば、右のごとき「市場価格」による

「市場価値」の置きかえⅡ「訂正」が当然おこなわれなければならないこと、かような置きかえⅡ「訂正」によって、はじめて「不明瞭な」(または、「曖昧な」)(4)の箇処が事理明白のものとなり、マルクスの市場価値および市場価格の規定にかんする上述の所説が科学的な理論的・論理的の一貫性を堅持しえられるものとなること、重ねて明確となるであらう。

x x x x x x x x

さて、以上のようにして、問題の四箇処を検討し、それらの中三箇処について「誤記」——あるいは、「誤記と思われるもの」——に必要な「訂正」を加えるならば、これらのいわゆる「不明瞭な」箇処は、均衡論的価値論にとつての有力な「論拠」となるどころか、むしろ反って、これら雑多の均衡論的歪曲がいかに皮相浅薄な『理解』にもとづいたものであるか、また、それらの「折衷的」試みがマルクスの片言隻句に拘泥して後生大事にこれをふり廻すことによつてのみ「成立」しているものであるか、ということが明白となるのである。理論は、理論的嚴密性および論理的の一貫性をもって、はじめて科学的理論たりうる。このような見地に立って、第三卷第十章の中に見出される若干の「誤記」を訂正し、もつて理論の科学性、一貫性を保持することは、われわれ理論を学ぶ者にとって、まさに義務でなければならないのである。(註)

(註) 右のごとき「訂正」に関連して、マルクスの論稿の中、同じく市場価値および市場価格決定の問題を取扱った他の箇処において、その意味がまぎらわしく、ために注意を要するものがあるので、とりあえず、つぎにその著しい例を二つ挙げて簡単な説明を加えておくことにしよう。

その一つは、「資本論」第三卷第三十八章「差額地代概説」の中に見出されるつぎのごとき一節である。

「商品の価値の本性がみずからを表示するのは、總じて市場価格の姿態においてであり、すすんでいえば規制的な市場価格

または市場生産価格の姿態であつて、ここに商品の価値の本性というのは、商品の価値はある一定量の商品または個々の商品を生産するために、個別的に——一定の個々の生産者にとって——必要な労働時間によって規定されるのではなく、社会的に必要な労働時間によって、すなわち、市場にある、同種商品の、社会的に必要な総量を産みだすために、社会的生産諸条件の所与の平均のもとで必要な労働時間によって規定される、ということである」(インスティトゥット版、第三卷、六九〇—六九一ページ、傍点—山本)。

右の一節の中、傍点を付した箇所の言葉は、価値が商品にたいする需要総量によって規制されるということを確言しているように思われるものがあるが、しかし、慎重に考察するならば、右のような推論が誤りであることに気が付くであらう。ここでの「社会的に必要な総量」とは、たんに社会的な使用価値をもっている商品総量ということの意味するだけであつて、その力点は、個々の商品の生産に要した個別的労働時間ではなく、社会的使用価値をもつ生産物総量についてその生産に必要な労働時間によって、商品価値が決定される、ということに置かれている。要するに、個別的に必要な労働時間ではなくして、社会的に必要な労働時間である、ということにはかならない。このような事情は、さきに図解をもつて示した「組合せ」による市場価値の決定を省みれば明らかとなるであらう。

つぎに挙げられるのは、「剰余価値学説史」第一卷、二三三—二三四ページに見出されるつぎのごとき「脚註」の部分である。「ある一定の生産部門に充用される労働時間の総量は、使用可能な社会的労働総量にたいして正しい比率より以下のこともあれば、以上のこともある。たとえば、生産物の各可除部分がこの生産に必要な労働時間だけしか含んでおらないとしても、あるいは、充用された労働時間の各可除部分が、それに相応する総生産物可除部分を生産するために必要であつたとしても、この見地からすれば、必要労働時間は、ひとつの別箇の意味をもつのである。問題となるのは、いかなる分量において、必要労働時間そのものが、それぞれ異なる生産部面に配分されるか、ということである。

競争は、たえずこの配分を規制し、また、たえずこれを止揚する。一部門に社会的労働時間の過大の量が充用されたとすれば、等価は、適當する量が充用されたと同じようにして、支払われるだけである。それゆえ、一部の総生産物——すなわち、総生産物の価値は、——その中に含まれている労働時間には等しくなく、この総生産物が他の部面における生産と均衡がとれていた場合に比率を保つて充用されたであらうところの労働時間に等しい。そして、総生産物の価格がこの価値以下に下がる

と同じだけ、その同じ生産物の各扣除部分の価格は下がる。四、〇〇〇エレルではなく、六、〇〇〇エレルのリンネルが生産されるならば、そして八、〇〇〇シリングが四、〇〇〇エレルの価値であるならば、六、〇〇〇エレルも八、〇〇〇シリングで売られる。各一エレルの価格は、「この後の場合には」二シリングではなく、一シリング三分の一であり、——その価格は、三分の一だけその価値以下にある。したがって、それは、一エレルの生産のために三分の一だけ多すぎる労働時間が充用されたのと同じである。それゆえ、商品の使用価値を前提すれば、その価格の価値以下への下落は、つぎのことを示すものである。すなわち、生産物の各部分には、社会的に必要な労働時間しか費やされなかったにもかかわらず、（この場合、生産諸条件は変化しないものと仮定する。）社会的労働の必要な総量より多くの、過剰な量がこの一部門に充用されたということである」（傍点およびゴチック体——山本）。

右の一節の中、傍点を付した箇處——「等価は、適當する量が充用されたと同じようにして支払われるだけである」——は、これまでくりかえし説明してきた価値と価格との乖離を述べたものである。等価（Äquivalent）とは等価物、あるいは等価値態にある商品、すなわち、他の商品の価値を表現するものである。交換価値または価格と同じ意味を有する。それは、かつて、当の商品の価値を絶對的に表現するものではない。この場合、とくに「等価が……支払われる」という言葉が明瞭に示しているように、問題は、ある一定の価値をもった商品が、その価値通りに売られるか否か——価値と価値実現——との関係という点にある。したがって、右の箇處に直接続く文章——「それゆえ一一部の総生産物——すなわち、総生産物の価値——は、その中に含まれている労働時間には等しくなく、この総生産物が他の部面における生産と均衡がとれていた場合に比率を保って充用されたであろうところの労働時間に等しい」——の中の、価値（Wert）は、当然、価格（Preis）または、市場価格（Marktpreis）に置きかえられなければならない。ただし、一一部の総生産物の価値は、「その中に含まれている労働時間に等しい」ものであり、「比率を保って充用されたであろうところの労働時間」はその市場価格にはかならないからである。このことは、これにすぐつづきぎの文章——「そして総生産物の価格がその価値以下に下がる」——が実証してあまりあるものであり、さらに後続のいろいろの言葉、たとえば「この価格は、三分の一だけその価値以下にある」、「その価格の価値以下への下落」、「社会的に必要な労働時間しか費やされなかった」は、いづれも、このことの説明としてのみ、意味をもちうるものであるのである。

なお、付言すれば、右の第二の引用箇処の中には、われわれが前稿（「市場価格と市場価値（三）」）の第二節「社会的必要労働時間について」において論じた「社会的必要労働時間」という言葉の二つの意味——とくにその「別箇の意味」——についての、より具体的な、立ちいった説明を見いだすことができるし、さらにまた、たとえば、「競争は、たえずこの配分を規制し、また、たえずこれを止揚する」という言葉によって余すところなく示されているごとく、価値法則をもって『社会的労働の配分を規制する法則』であるとなす似而非価値法則論にたいする直接的な、うたがう余地のない論駁をも見出すことができる。配分を規制するものは、競争（厳密には、資本家的競争）であって、価値法則ではないのである。

四、問題の箇処についての「技術説」的解釈

「技術説」的立場を堅持される横山氏が、「社会的必要労働時間の規定の要點」として、商品の価値の大きさを決定するものは、「その生産において技術上社会的に必要な労働時間にほかならない」ことを挙げられ、「労働の生産力が変化すれば、社会的に必要な労働時間も変化し、したがってまた価値も変化することとなる」として、「生産力の変動」なるものに重要な意義を与えていられることは、さきに前稿において述べたとおりであるが、問題の「曖昧な箇処」について、氏がこの「生産力の変動」という要因をいかに驅使されるかを、つぎに検討しておかなければならない。

さきに考察したごとく、われわれは、論理的・理論的一貫性を堅持するかぎり、若干の「誤記」を「訂正」せざるをえないし、また、この「訂正」によって、はじめて右の「曖昧な箇処」の意味が明瞭、かつ一貫したものとなりうるといふ、結論に達したのであるが、横山氏は、むしろ、これらを「誤記」と見なさず、原文を文字どおり正しいものとして、たんにその「不明瞭な意味」を明瞭ならしめるべく、「技術説」的な「解釈」を与えることに力を注がれ

ているのである。

氏は、まず、つぎのように問題を「提起」される。

「しかるに、マルクスは、他方において、需給関係は市場価値そのものの上にも影響する、というふうな一見相矛盾した言い方をもしている。すなわち、「第一の乖離は、商品量が余りにも小であるとすれば、最悪の諸条件の下に生産された諸商品がつねに市場価値を規制し、また商品量が余りに大であるとすれば、最良の諸条件の下に生産された諸商品がつねに市場価値を規制することである。換言すれば、相異った諸条件の下に生産された商品諸量間の単なる比例の如何に従って結果の上に差異を来さねばならぬにもかかわらず市場価値を決定するものは両極のいづれか一方だということである」と。この矛盾はいかに解決すべきものであろうか。これは、市場価値の変化の問題として、すなわち、一定の生産部門におけるある支配的な生産諸条件が他の支配的な生産諸条件に移る際に生ずるところの市場価値の大きさの変化過程の問題として、究明されねばならぬわけである」（前出、二三八ページ、傍点—山本）。

見られるとおり、問題は、「市場価値の変化の問題」としてとらえられ、しかも、「ある支配的な生産諸条件が他の支配的な生産諸条件に移る際に生ずるところの市場価値の大きさの変化過程の問題」というように、「解釈」され「提起」されているのである。「ある支配的な生産諸条件」が「他の支配的な生産諸条件に移る」ということは、要するに、商品大量の「比重」の変化に移動、いいかえれば、「組合せ」の変化にほかならない。商品量が余りに小である場合に、何故に商品大量の「比重」または「組合せ」に「変化」を生ずるか、また、「商品量が余りに大である」場合には、何故に同じく「組合せ」に「変化」が生ずるか？——これは、きわめて重大な問題でなければならぬ。とこ

るが、氏は、さきの「生産力の変動」要因をもって、事柄をつぎのように処理されるのである。

まず、「商品量が余りに大である」場合について。

「たとえば、ある生産部門の商品が三つの等級の企業によって供給され、中位の生産条件の企業が商品総量の大半を供給し、上位と下位の企業の供給量は相互均衡しているとする。この場合には、市場価値は中位の企業の商品の個別的価値とほぼ一致する。しかるに、いま、上位の企業の数が増加するかまたその労働生産性が増加するかして、これらの企業が商品量の大半を供給するようになったとすると、供給は需要を超過し、市場価格は市場価値以下に低落する。ところで、この場合、市場価格の低落は需給関係の変動の結果生ずるのではなく、上位の企業の比重が増大した結果として生ずるのであるから、その限りにおいて、結局下位にあるいくつかの企業は閉鎖し、中位の企業のいくつかもまた閉鎖するに至る。かくして、市場価値はいまや商品の最多数を供給するに至った上位の企業の個別的価値によって規制され、市場価格はあらたに形成された市場価値の上に立つ。ところでこの場合、一見したところ、市場価値の低下は、供給が需要を超過するに至った結果であるかのように見えるかもしれない。しかし、実際においては需要に対する供給の超過を通じて、最も生産的な労働力がすべての企業で用いられるようになり、生産性の比較的小さい労働が駆逐される結果として、増大した社会的生産力が市場価値に及ぼした影響が実現され、たにすぎないのである。価値の大きさに関する法則、すなわち、「商品の価値の大きさは、その商品で自らを実現する労働の分量に正比例し、生産力に逆比例して変動する」という法則は、市場価値の上にも完全に押し及ぼされているわけである。この場合需給関係の変化は、労働生産力の変化と市場価値の変化とを媒介する環にすぎず、需要に対する供給の超過は、この生産部門における労働生産力の増大の作用を隠蔽しているにすぎない。かくて、あ

たかも、需給関係そのものが、市場価値の変化を惹起すかのごとく見えるのである」（前出、二三九―二四〇ページ、傍点（山本））。

見られるとおり、右の説明の中には、たんに論理的にみただけで、きわめて重大な問題がすくなく含まれている。まず第一に挙げられるのは、マルクスの述べていることと、横山氏の説明されているところとは、事柄が明白に異なっていることである。マルクスは「商品量があまりに大であるとすれば」、「最良の諸条件の下に生産された諸商品が、つねに市場価値を規制する」と述べている。これにたいして横山氏は、まず第一に「上位の企業の数が増加するかまたはその生産性が増大するかして、これらの企業が商品量の大半を供給するようになったとする」という「前提」をおかれ、しかる場合にはじめて「供給が需要を超過し、市場価値は市場価値以下に低落する」と言っている。マルクスにあっては、「前提」は、「商品量があまりに大である」ということだけ、すなわち、「供給が需要を超過する」ということだけである。横山氏にあっては、「前提」は、「上位の企業の数が増加するか、あるいは、上位の企業の労働生産性が増大する」ということである。このようにまったく相異なる「前提」から導き出される「結果」も、おのずから完全に相反したものとならざるをえない。マルクスにあっては、その「結果」は、「最良の諸条件の下に生産された諸商品が、つねに市場価値（これは、「市場価格」の誤記である―山本）を規制する」ことであるが、横山氏は、むしろその反対に、マルクスの「前提」をば「結果」に変えてしまわれる、――すなわち、氏にあっては、その「結果」は実に、「供給が需要を超過すること」、「市場価格が市場価値以下に低落すること」なのである。マルクスの叙述と、横山氏の「説明」との間の、「論理的構造」の相違——というよりも、むしろ、両者の相反関係——は疑う余地がない。

のみならず、横山氏の所説についてだけみた場合にも、理論的にきわめて重大な問題をふくんでいるのである。まず、説明の便宜上、氏の「前提」から最後の「結果」にいたるまでの論理的「経緯」^(註)をつぎに簡単に列挙してみよう。

「前提」——「上位の企業の数の増加」または「上位の企業の労働生産性の増大」。

「結果」(第一)——「供給は需要を超過する」。

「市場価格は市場価値以下に低落」。

「結果」(第二)——「下位にあるいくつかの企業の閉鎖および中位の企業のいくつかの閉鎖」。

「結果」(第三)——「市場価値は商品の最多数を供給するに至った上位の企業の個別的な価値によって規制され

る」。

(註) 念のため、マルクスの敘述(訂正を加えたもの)における論理的「経緯」をこれに對比させて示せば、つぎのとおりである。

「前提」——「供給は需要を超過する」。

「結果」——「市場価格は、上位の企業の個別的価値によって規制される」。

まず横山氏の説明における理論的・論理的「経緯」の出発点たる「前提」と「結果」(第三)とを比較されたい。

「上位の企業の数の増加」、あるいは「上位の企業の労働生産性の増大」とは、そもそもどういうことであろうか？

それは、ほかでもない、上位の企業が「商品の最多数を供給するに至った」ということである。それゆえ、氏の「経緯」における中間項たる「結果」(第一および第二)は、まったく不必要であるばかりか、有害でさえある。なぜ不

必要というか？ それは、上位の企業の数が増加すれば、「組合せ」そのものが変り、したがって、だちに市場価値は上位の企業の個別的価値によって規制されるようになることは、当然すぎるぐらい当然だからである。その中間に、需要供給の関係を挿入する必要は毛頭ない。また、なぜ有害かといえば、右の「前提」そのものから「結果」(第一)および「結果」(第二)への移行行きは、論理的にいつてきわめて「恣意的」だからである。「上位の企業の数が増加」したからといって、また、「上位の企業の労働生産性が増大」したからといって、その「結果」として、ただちにその商品の供給が需要を超過するということにはならない。なるほど、「上位の数の増加」または「上位の企業の労働生産性の増大」は、供給の増加をもたらすことは必然的である。しかしこの供給の増加には、同じ程度の需要の増加を惹起する場合もありうるのである。横山氏は右の文章の中で「この場合需給関係の変化は、労働生産力の変化と市場価値の変化とを媒介する環にすぎない」と述べていられるが、いかに「媒介環」にすぎないにせよ、この「媒介環」なしには、氏の理論的構造はその根柢から崩壊してしまわなければならない性質のものなのである。ところが、右にみるように、この「媒介環」が必然的なものでないとすれば、氏の所論は、全体として成立しがたくなるのは当然である。氏は、また、「労働生産力の変化」ということに重點をおかれているが、「労働生産力の変化」はそのものとしては、市場価格の決定はいうにおよばず、市場価値の決定にもならん影響をおよぼすものではない。それが、供給量という形において働らく場合に、いいかえれば、それが社会的総量においてあらわれる場合にはじめて、市場価格および市場価値の決定に影響をおよぼしうるのである。しかも、市場価格の決定と市場価値の決定とは、同じく社会的総量という形において問題になるとしても、その意味は異なる。市場価格の決定にとっては、社会的供給総量と社会的需要総量との関係という面が意味をもち、市場価値決定の場合には、社会的供給(≡生産)総量

の「組合せ」という面が意味をもつのである。

以上述べたところによつても、「技術説」的立場から、マルクスの所論（『誤記の個処』を「正當化」しようとする試みがきわめて問題あるものであることは明らかとなつたであらう。要するに「技術説」的解釈の誤謬の根源は、——価値法則そのものについての明確な觀念の欠除という點をのぞけば——「労働生産力の変化」という一事にあまりに眼を奪われたこと、価値と市場価値との間の根本的な異同關係についての理解がなお充分とはいひがたいこと、——この二點に求めることができるのであつて、これを一言でいうならば、「技術説」的先入主によつて災ひされたものといふべきであらう。

なお、マルクスの叙述の他の一半——「商品量が余りに小であるとすれば、最悪の諸条件の下に生産された諸商品がつねに市場価値（正しくは市場価格——山本）を規制する。」——についての横山氏の説明は、右にみた「供給の過大な場合」の説明とまったく同一性質の論理的「経緯」によつて成り立っており、したがつて、同じく論理的『理論的誤謬を重ねているものではない。念のため、つぎにこれにかんする氏の説明を掲げておくことにしよう。

「また、この同じ例解についても、なんらかの原因で需要が増大し、その結果市場価格が市場価値以上に騰貴したとする。そして、この原因が一時的なものでなく永続的なものであるとすれば、やがて生産の拡張が行われる。いまもし、上位や中位の企業は拡張されず、下位の企業だけが生産拡張を行ったとすると、（このようなことは決して珍しいことではない、というのは、不利な条件の下で経営する企業の拡張には、僅かな資金しかいらぬからである。そこで、余り大きな資本を必要としない中小企業が、運転を開始することができぬわけである）、下位の企業が商品量の大半を供給しはじめ、市場価値は、もはや中位の企業の商品の個別的価値とは一致せず、下位の企業の

個別的価値に接近するようになる。この場合にもまた、市場価値は需要の増大の結果として昂騰したかのように見える。しかしこの場合にも、労働生産力の変化——すなわち生産性の比較的低い労働が大多数の企業で用いられるようになったことが、市場価値の昂騰を惹き起し、この基礎の上に市場価格のあらたな安定が得られたのであって、需給関係の変化はただ労働生産力の変化の影響の実現を媒介するものにすぎず、それは事態の本質を隠蔽する（「前出、二四〇—二四一ページ、傍点—山本」）

ここに引いた横山氏の説明の中には、少なからず問題の個処が見出されるが、さきに述べたところとの重複をさけるために、以下、簡単に、論理的—理論的難点を列挙してみよう。

（１）「需要の増大」が発端点であり必要不可欠の「前提」となっているにもかかわらず、最後にいたって「需給関係はただ労働生産力の変化の影響の実現を媒介するものにすぎない」と「結論」される。「需要の増大」が「生産の拡張」を惹きおこし、したがってまた「労働生産力の変化」そのものを惹きおこしたのではないか。

（２）「生産の拡張」が行われる場合、何故に「下位の企業だけ」が生産拡張をおこなうというのか。——むしろ、現実においては、生産の増加、したがって拡張は、優良な条件をもつ上位の企業の方がより容易である。なぜならば上位の企業のすすんだ生産設備は生産能力の伸縮性に富み、しかも、上位の企業は生産拡張に対応すべき多額の資金をより豊富に供給されうるからである。

（３）「いまも、下位の企業だけが生産拡張を行ったとすると」というような純然たる仮定の上になつてその仮定からの「帰結」をひきだしたとしても、その「帰結」が何ほどの理論的意義をもちうるであろうか。問題は、必然的な「帰結」を導き出すことになければならない。まことにあやふやな「仮定」の上になつての結論が妥当で

あるとするならば、これと同じように、「い、ま、も、し、上位の企業だけが生産拡張を行ったとすると」いう「假定」を設けることも許されねばならない。然るときには横山氏のひきだされる「帰結」とはちがって、それとまったく正反對の「帰結」、すなわち、「市場価値の低下」を惹きおこすにいたるのである。

以上見てきたところによっても明らかなごとく、いずれの場合にも、横山氏は、その説明の「発端」ないしは「前提」、または「結果」(第一)に「需要供給の変化」という、「要因」を据えていられるのであるが、しかるにもかかわらず、最後の「結論」においては、つぎに見られるごとく、一転して、需給関係は、「労働生産力変化」に参与する「要因」たる地位から放逐されてしまうのである。

「以上見たごとく、商品の市場価値は、これらの商品に対する需要 \parallel 社会的欲望とは、なんらの関係もない。市場価値は、もっぱら生産における技術的要素によって決定され、需要 \parallel 社会的欲望は、ただ市場価値の実現において、すなわち商品がその市場価値をもって販売される条件の決定において問題となるにすぎない(前出、二四一ページ、傍点—山本)。

はたして、これまでの氏の説明において、需要供給の関係は、「労働生産力の変化」 \parallel 市場価値の決定(変化)とは、「なんらの関係もない」ということが示されていたであろうか？ 需要供給の関係は、市場価値通り売られるか否かという、市場価値実現の問題においてのみ、問題となりうるかが論証されていたであろうか？ ことは、理論の領域の問題ではなくして、それ以前の、たんなる論理の領域の問題に属する。右のような「結論」をひきだす仕方こそ、まさに独断的「飛躍」と称さるべきであり、かかる「飛躍」をもあえて許さざるをえなかったのは、一にかかって、「技術説」的結論の必要に出たものと考えられるのである。いずれにせよ、右のごとき説明をもって、マルクスのいわ

ゆる「不明瞭な個処」を「解釈」しつくしたとなすことは、二重の意味において誤謬を犯すものといわなければならぬ。ひとつは、マルクスの主張そのものを文字通り「作り変えてしまう」ということによって、いまひとつは、さらに支離滅裂な論理的「経緯」をつくり上げることによって。しかも、なおその上に重大なことは、マルクスの誤記を正しいものとして「合理化」することにより、需給関係と市場価値決定との関連についてのマルクスの所論の論理的貫性が害われ、その理論的科学性が根本から傷けられざるをえない、ということである。(註)

(註) マルクス価値論の「専門家」と目される遊部氏も、右のいわゆる「不明瞭な箇処」について「説明」を与えていられるが、この「説明」にはやはり氏独自の「解釈」がふくまれているようである。参考までに、以下、氏の「説明」を掲げてみよう。

「市場価値すすんでは生産価格と市場価格及び需要供給の三者が、それぞれ相互に相手方を予想し合つてゐる(?!)」ことは、いままで論述したところであきらかであるうが、ここで市場価格の成立が一見需要供給の変動によって生じたかの如くであつて、しかもその根柢に市場価値の変動を有するという一言しておく。

例えばある生産部門の商品が三つの等級の企業によって供給され、中位の生産条件の企業が最多数の商品を提供し上位下位の企業の供給量は相互均衡しているとする。この場合、この生産部門の商品の市場価値は中位の企業の商品の個別的価値とはほぼ一致する。しかるに今上位の企業において企業数が増加するか又は労働生産性が増加するかして、上位の企業が当該生産部門の商品総量の大半を供給するにいたつたとすれば、供給は需要を超過してその結果市場価格は市場価値以下に低落し下位乃至中位の企業の一部は閉鎖する。かくして市場価値は今や(?!)商品の最多数を提供するに至つた上位の企業の個別的価値によつて規制され低落せる市場価格は新たに形成された市場価値の上に(?!)立つ。この場合、結局(?!)需給の変動は市場価格まゝしてや(?!)市場価値の変動をもたらしたのではなく、それはこの生産部門における労働生産力の増大の作用(?!)を隠蔽したにすぎない。即ち社会的労働生産力の増大はこの場合、需要にたいする供給の超過、市場価格の低下、下位企業の閉鎖を通じて市場価値の上に作用してそれを新たな市場価格の土台たらしめたのである。

又、この同じ例解について、例えばなんらかの理由で需要が増大しその結果市場価格が市場価値以上に騰貴したとする。右

の原因が一時的ではなく永続的であるとすれば、やがて生産の拡張が行われる。今もし下位の企業だけが生産拡張を行ったとすれば、下位の企業が商品の最多数を供給はじめ、市場価値はもはや中位の個別的価値と一致せず下位企業の個別的価値に接近するようになる。この場合にも社会的労働生産力の変化（生産性の比較的低い労働が大多数の企業で用いられるに至ったこと）が市場価値の昂騰をもたらしこの基礎の上に市場価値の新たな安定（!）が得られたのであって、需給の作用はかかる因果の媒介たるにすぎぬが、それは事態の本質を隠蔽する。

その他考へべき種々の場合（!）をひくくめて（!）右の例解の適用によってこれを（何を？）解しうるであらう。かくして需給の比例関係、その結果としての市場価格の変動は、社会的労働生産力の変化と市場価値の変化とを媒介すべき中間の環でしかないことが明らかとなった。たとえ一見需給の作用によって市場価格が自由に変動したかに見えても（!）それは当座のこと（!）であってある期間（!）をおいてみれば、その実（!）その背後には生産力の変化—価値体系（!）—の変化が存し、新たな市場価値の形成とその上への（!）市場価格の安定（!）が行われるのである」（遊部氏著、「価値と価格」二六五—二六六ページ、傍点および（!）——山本）。

ここにかかげた遊部氏の「説明」と、さきに引用した横山氏の説明とを、こころみに比較されたい。さすれば、両氏の「説明」の中心的部分が寸分違わないものであることがあきらかとなるであらう。なぜ、このような事態が生じたかといえ、両氏とも、この「説明」の中心的部分を、ローゼンベルグ著「資本論註解」第三卷（直井、淡沢）より、文字通り借用したものである。（ただし、横山氏は「説明」に入る前に、ローゼンベルグの著書に拠る旨を明記していられるのになんとして、「一言しておく」と述べられる遊部氏は、たんに右の著書を「参照」と註記されているだけである）。

しかし、同じくローゼンベルグの「説明」をそのまま引用したとはいえ、両氏の「解釈」にはかなりの開きがあることに注意が払われなければならない。横山氏にあっては、すでにくりかえし見たごとく、「労働生産力の変動」要因をもって論稿の一つの「主軸」とされ、これによって論理の一貫性を保つことに努力を傾けていられているのであるが、「一言しておく」とどまる遊部氏にあっては、ローゼンベルグの著書からの引用は、文字通り借物に終り、「価値」規定および市場価値規定についての一貫した論究は見出されたいのである。このことは、右の「借用」した中心的部分につづく氏独持の「結論」のうちに端的に示されていると考えられる。すなわち、右の中心的「引用」部分につづいて、横山氏は、「以上見たごとく、商品

の市場価値は、これらの商品に対する需要——社会的慾望とはなんらの関係もない」というように、マルクスの本来の主張に立ちかえていられる——さきに示したごとく、氏の結論の論理的飛躍はしばらく措くとして——のであるが、遊部氏は、右の中心的「引用」部分にもとずいて、ただちに、つぎのごときまったく見当はずれの「結論」を表明されるのである。

「されば（!）、『需要供給が市場価格を決定すると同様に、他方にはまた、市場価格及び更に進んで分析すれば市場価値が需要供給を決定する』」（前出、二六六ページ、（!）——山本）。

右の「結論」のうち『』の部分は、マルクス「資本論」第三卷第十章からの「引用」である。見られるごとく、「需要」社会的慾望が市場価値の決定にとって関係がない」ということを「説明」しているローゼンベルグの文章と、これとまったく別の事柄を述べているマルクスの文章とが、いとも無難作に「されば」という一語をもって結びつけられ、ローゼンベルグからの「引用」は「論拠」の役割を、マルクスからの「引用」は「結論」の役割を強力的に押しつけられているのである！ここには、今日わが国の経済学界の一部においてなお跡をたたない「引用」による「作文」の例が見出されはしないであらうか。遊部氏の「論法」についてはもちろんのことであるが、たとえば横山氏のごとく、可能なかぎり論理の一貫性をはかろうと努めてもお、われわれが、マルクスの方法によりマルクスの主張を一貫して把握することにまず努力を傾けることをしないで、反対にたんなる註解書の一節によって——これを批判的に考察し、マルクスの主張との喰い違いを洞察することなく、かえって——マルクスの主張を「解釈」しようとするならば、理のおもむくところ、マルクスの眞意を根本から歪めるの結果に陥らざるをえないということ、——このことを、われわれは、両氏の論稿の検討を通じて教えられるのである。

五、「折衷説」的あるいは「需要供給説」的説明の一、二の例について

第三卷第十章におけるいわゆる「不明稗な箇処」そのものをとり上げてこれに「解釈」をあたえるという明確な方法をとることはあえてしないが、しかし、問題の箇処についてあきらかに一定した「解釈」をもち、この「解釈」の内容をば、問題の箇処と離れて、一般的な形で説明しておこうという方法を採る理論家も、時として見受けられるよ

うである。われわれは、この種の理論家の所説について、一、二の例を検討しておくことは必要だと考える。ここにとり上げるのは、一方における代表的な理論家と目される宇野弘藏および向坂逸郎の両氏の所論である。

まず、宇野氏の「説明」から見てゆくことにしよう。宇野氏は、その主著「経済原論」あるいは「恐慌論」において典型的に示されているごとく、マルクスの「資本論」をマルクス流にではなく、「宇野氏流に」「解釈する」ことをもって本来の「課題」とされており、マルクスにとって問題の存しないところにもつねに「問題」を「発見」し、マルクスの「欠陥」を「補足」または「克服」することにとめていられるようであるが、いかなる理由によるものであろうか、多くの論者が問題として論議しているいわゆる「不明瞭な箇処」については、なんらの「問題」をも「発見」されなかったようである。おそらく、「事理明白」と簡単に割りきって考えられたものと思われる。では、どのように「割りきられた」か、をつぎに、氏の所説についてうかがうことにしよう。

いわゆる「不明瞭な箇処」の部分に相当すると思われる「説明」は、氏の主著「経済原論」下巻、第一章「利潤」の「二、一般的利潤率の形成」の「C、生産価格と市場価格。資本の競争」の中に見出すことができる。宇野氏は、その「(1)商品の個別的価値と市場価格と市場価格」と題する一節において、まず、「社会的必要労働時間」への「換算」の内容に触れ、それは「個々の商品の個別的価値が市場を通して社会的に形成するのである」と述べて、以下、つぎのように「説明」をおこなわれる。

「同じ商品でも生産条件を異にすれば、その個別的価値を異にするのであるが、市場においてはそれがためにそれぞれ異った価値を有するものとして売、買されるわけにはゆかない。いい換えれば社会的平均の生産条件の下に生産された商品の個別的価値がこの市場価値を規定することになる。尤も社会的平均条件の下に生産された商品にして

もそれがその個別的価値で需要される量を十分に供給し得ないで、比較的劣等な条件の下に生産される商品がその個別的価値をもって販売されてもお需要が減少しないということであれば、平均的条件の商品の個別的価値が市場価値を規定するということにはならない。かかる商品もまた比較的劣等な条件の下に生産された商品の個別的価値で販売され得ることになるであろう。この場合、市場価値が如何なる程度までかかる劣等な条件の商品の個別的価値に接近し、或いはまた一致することになるかは、比較的優良な条件の下に生産される商品や平均的条件の下に生産される商品が如何なる量において生産され、それらが如何なる程度に社会的需要を満たし得るかにかかることである。最悪の条件の下に生産された商品の個別的価値によってすべて同種の商品が販売されてもお需要の減退が生じないとすれば、その個別的価値が市場価値を規定することにもなる。いずれにしろ市場価値以下の個別的価値をもって生産するものは特別の剰余価値を得るわけである。

これに反して若し比較的優良な条件の下に生産された商品が已に市場の需要を或程度満たすというような場合には、その個別的価値が市場価値を規制する。平均的条件の商品も、比較的劣等な条件の下に生産される商品もその個別的価値以下に販売せられざるを得ない。実際上はそれがかかる不利なる条件の商品は生産されなくなるといふことになるかも知れないが、ここではそういう場合には比較的優良な条件の商品が増産されて市場の需要を満たすことになるものとしなければならない。したがって比較的劣等な条件の商品も供給の一部をなしている限り、その個別的価値が市場価値を規定する筈だということにはならない。同一種類の商品は、各々の生産者によって種々異った条件で生産され、それぞれ異った個別的価値を有するものであるが、市場ではそれが一定の市場価値を有するものとして他の種の商品と交換せられるのである。種々なる条件の下に生産される商品が、いずれも一

をなして市場に供給せられるわけである。その市場価値はそれぞれ異なる条件の下に生産される商品がその内で如何なる量を占め得るかによって決定される」(前出、九二—九三ページ、傍点—山本)。

見られるとおり、宇野氏の市場価値規定の説明は、マルクスのそれと大分隔たりがあるようである。われわれは、厳密を期するために、氏の「説明」を構成している個々の文章について、それがどのようなことを本来意味するものであるかを、検討することにしてしよう。

(1)、「同じ商品でも生産条件を異にすれば、その個別的価値を異にするのであるが、市場においてはそれがためにそれぞれ異った価値を有するものとして売買されるわけにはゆかない」(傍点—山本)。

この最初に掲げた文章は、一見なんら奇異なところはないように思われるが、しかし、この傍点を付した箇所は、とくに注意を要するものがある。ある「価値を有するものとして売買される」という點に、氏は、市場価値の意味を求めていられるようであるが、ある「価値を有するものとして売買される」ということと、市場価値とは、直接なんらの関係もないのである。ある「価値を有するものとして売買される」ということは、要するにある「価格をもって売買される」ということではない。その販売価格が価値そのものと質的に異なること、そしてまた、多くの場合量的にも異なるをえないことは、いまさら云うまでもないことである。宇野氏が、ここで市場価値と市場価格(あるいは、氏のためにもっと丁寧ないうならば、市場販売価格)とを混同していることは、明らかであろう。この混同の事実は、右につづく文章——「いい換えれば、社会的平均の生産条件の下に生産された商品の個別的価値がこの市場価値を規定することになる」(傍点—山本)——が、これを実証している。

(2)「尤も社会的平均条件の下に生産された商品にしてもそれがその個別的価値で需要される量を十分に供給し

得ないで、比較的に劣等な条件の下に生産される商品がその個別的価値をもって販売されてもなお需要が減少しない、ということであれば、平均的条件の商品の個別的価値が市場価値を規定するということにはならない。かかる商品もまた比較的に劣等な条件の下に生産された商品の個別的価値で販売され得ることになるであろう。（傍點——山本）

「社会的平均条件の下に生産された商品」が「その個別的価値で需要される量を十分に供給し得ない」し、また「比較的に劣等な条件の下に生産される商品がその個別的価値をもって販売されてもなお需要が減少しない」というようなことは、いかなる事態を指しているものであろうか？ 要するに、その商品の供給量に比して、社会的需要がより強大であるということにすぎない。このような場合には、どういうことが生じるか？ 明らかに市場価格が市場価値から離れて上廻るということである。「需要が減少しない」という事情によって「規定」されるのは、市場価格であつて市場価値ではない。市場価値は、需要のいかんにかかわらず、たんに供給と生産の側における「組合せ」によつてのみ、決定される。この供給と生産の量が社会的需要量に対応するか否か、それよりも多いか少ないか、ということは、市場価値決定にとってはなんらかかわりない。宇野氏がここで「需要される量を十分に供給し得ないで」と述べているのは、いささか「デリケートな」ものがあるが、しかし、それが「組合せ」における比重となんら関係ない事柄を、いいかえれば、需要に対応した供給量のみを、指していることは、疑いをいれない。ここでも、宇野氏が市場価格の規定と、市場価値の規定とを無原則的に混同していられることは明白である。「かかる商品もまた比較的に劣等な条件の下に生産された商品の個別的価値で販売され得ることになるであろう」という文章も、この混同を裏書きしてあまりあるものである。供給に比して需要が強大であれば、市場価格は市場価値を大いに上廻り、平均的条

件の商品、いかえればその個別的価値が市場価値に等しいところの商品は、より高い個別的価値に等しい市場価格で販売されるのである。宇野氏のごとく、「需要の強大」および「販売される」という二事（これは結局、「需要対供給の関係」という一事に帰着する）によって、市場価値が規定されると主張するときには、そもそものはじめから、市場価値と市場価格との差異はなくなり、したがってまた当然、市場価値からの市場価格の背離の問題もまったく消え失せてしまうのである。

(3)「この場合、市場価値が如何なる程度までかかる劣等な条件の商品の個別的価値に接近し、或いはまた一致することになるかは、比較的優良な条件の下に生産される商品や平均条件の下に生産される商品が如何なる量において生産され、それらが如何なる程度に社会的需要を満たし得るにかかるとである。最悪の条件の下に生産された商品の個別的価値によってすべての同種の商品が販売されてもおお需要の減退が生じないとすれば、その個別的価値が市場価値を規定することにもなる。」

いまさらいうまでもなく、「市場価値が如何なる程度までかかる劣等な条件の商品の個別的価値に接近し、或いはまた一致することになるかは」、「かかる劣等な条件の商品」の量が供給し生産、側における「組合せ」においていかなる比重を占めるにかかっている。この「組合せ」は、「劣等な条件の商品」の量にたいして、「比較的優良な条件の下に生産される商品や平均的条件の下に生産される商品が如何なる量において生産される」かということによってきまる。だが、宇野氏が、この場合、「比較的優良な条件の下に生産される商品や平均的条件の下に生産される商品が如何なる量において生産され……」と述べられるのは、ただだんに、「それらが如何なる程度に社会的需要を満たし得るか」というように「社会的需要量」のみに結びつけんがためにほかならない。かくして、「組合せ」の問

題は宇野氏の視野から完全に消え失せ、市場価値は——「組合せ」のいかんにかかわらず、したがってまた、マルクスにしたがえば、一定の「組合せ」によってすでに決定されているはずであるにもかかわらず、——「それらが如何なる程度に社会的需要を満たし得るか」というように、一定の供給量に対応する社会的需要量が変化するたびに、いいかえれば、「需要の減退または増進」しだいで、それぞれ異つて規定されることになるのである。宇野氏が市場価値と市場価格とを完全に混同していることは、この場合にも明瞭である。

（４）「いづれにしろ市場価値以下の個別的価値をもって生産するものは特別の剰余価値を得るのである」。

宇野氏が市場価値と市場価格とを混同していること、より厳密にいえば、市場価値なるものをまったく理解しえられないために市場価格をもって市場価値と誤解していることは、すでにくりかえし説明してきたとおりである。この（４）の文章は、そのものとしては、当然のことを述べたまでのものであるが、しかし、この変哲もない文章も、市場価格をもって市場価値と考える論者がこれを繰り返すときには、完全な誤謬を犯すことになる。宇野氏のいわれる「特別の剰余価値」とは、宇野氏自身述べられているとき「かかる商品もまた比較的に劣等な条件の下に生産された商品の個別的価値で販売され得る」場合の、市場価値と個別的価値との「差額」にはかならないのであって、このような「特別の剰余価値」は、宇野氏の主張されるごとく、社会的需要の強さの如何によつていかようにも変りうるものであり、したがってまた、場合によつては、——供給量があまりに過小な場合、あるいは需要量があまりに過大な場合——「比較的劣等な条件の商品」もこれを得ることができているものである。要するに、宇野氏にあっては「特別の剰余価値」とは、マルクスの言葉に引き直していえば、市場価格と個別的価値との「差額」にすぎない。だが、マルクスにあっては、「特別の剰余価値」は、市場価値と個別的価値との差額以外のなものでもないのであ

る。この、宇野氏の所論とマルクスの理論との差異は、一見たいした事柄ではないように思われるが、しかし、この場合における市場価値と市場価格との差はある意味で決定的なものである。けだし、生産部門間における資本の移動、これによる一般的利潤率の成立の運動、したがってまた一般に生産価格そのものについての理解は、市場価値と市場価格との——無原則的な混同ではなくして——明確な区別、「特別剰余価値」をまず個別的価値と市場価値との差額として把握すること、を不可欠の要件としているからである。

宇野氏は、なおひきつづき、「需要」とか「販売」という言葉を用いて、市場価値と市場価格との混同、というより、市場価格を市場価値とはき違えることを自ら暴露されているが、しかし、左の一節にいたって、この「混同」ないしは「はき違い」は、反転して、マルクスの「組合せ」の理論によって「おきかえられる」ものごとくである。

(5) 「種々なる条件の下に生産される商品が、いずれも一体をなして市場に供給せられるわけである。この市場価値はそれぞれ異なる条件の下に生産される商品がその内、如何なる量を占め得るかによって決定される」(傍点——山本)。

「それぞれ異なる条件の下に生産される商品がその内、如何なる量を占めるか」ということは、とりもなおさず、供給の側における例の「組合せ」のことにほかならない。この場合には、供給と生産の側における量的構成のみが問題であって、「社会的需要」や「販売」のごときは問題となりえない。それゆえ、宇野氏は、ここにおいて、これまでの「需要説」的解釈を排して、マルクスのそれと同じ見地にかえったかのように思われるのである。さきにくりかえし述べたごとく、市場価値規定にかんするマルクスの主張に多少とも通じているひとはこのように解しやすいし、また、このように解されることを期待して、宇野氏自身、右のごとき文章をもって結ばれたかも知れぬ。だが、ここ

に注意を要するのは、宇野氏の右の一文の最後におかれてある「占め得るか」と言葉である。マルクスにあっては、市場価値を決定するものは、もとより供給総量における「組合せ」であり、「いかなる量を占めて、いか」にある。「占め得るか得ないか」ではない。現に「占めている」ところの「組合せ」がこれを決定するのである。ところが、宇野氏が、ことさら、「得るか」というように記していられるところに、むしろ、氏独特の「狙い」があると見なければならぬ。この「得るか」という言葉は、「市場の需要をいかなる程度に満たし得るか」という言葉に直接結びついているものと見るのが、宇野氏の右の所論全体に照らして妥当であり、恐らく、それ以外の意味をもちえないものとして使用されていると思われる。したがって、一見、マルクスの市場価値決定論に酷似していながら、しかも、マルクスの市場価値決定論を市場価格決定論にすりかえてしまうほどの偉力をば、この「得るか」という言葉はもっているのである。

宇野氏による右のごとき「混同」ないしは「すりかえ」は、なお、さきに掲げた一節につづくパラグラフの冒頭におかれたつぎのごとき一文がこれを裏書きしている。

「市場価値は、しかしまた常に市場における価格によって示されるわけではない」（前出、九四ページ、傍点―山本）
「市場における価格」とは何か？　いうまでもなく、市場価格であり、宇野氏流の表現を用いれば、市場販売価格にはかならない。この一文以上に、氏の「混同」ないしは「すりかえ」を端的に示しているものは、またとないであろう。

宇野氏は、右に掲げた引用箇処以外において、（あるいはまた、右の引用箇処に付した註記の中でも）マルクスの言葉に酷似した文章をあまた書き綴られているのであるが、爾余の箇処が、マルクスの所説に近づけば近づくほど、

右の引用箇處の「需要説」的本質はますます鮮明なものとなり、したがってまた、宇野氏のこの問題にたいする「折衷説」的理解もあらわなものとならざるをえない。

以上によって、宇野氏の所論の「折衷説」的、あるいは「需要説」的性格はほぼ明らかにされたものと思われるが、なお、右のごとき、市場価値と市場価格とのきわめて幼稚な「混同」ないしは「すりかえ」は、何にもとずいてゐるか、ということが考察されなければならないであろう。右の「混同」ないしは「すりかえ」の「根拠」は、主として、氏が価値そのものの把握において基本的に欠けるもののあること、とくに、第一巻における価値論の本質的部分についての深い洞察が全然欠除しており、したがってまた、第一巻における価値論と第三巻における市場価値論との関連を正しく弁証法的に把握しえられないという點にこそ求められるべきものと考えるのである。だがこの點についての立ちいった論究は、本稿第四節においておこなうことにしよう。

では、向坂氏の「説明」は、この問題にかんして、どのように答へ得るものであろうか？ 最近における氏の主著「経済学方法論」全三冊は、マルクス経済学についての氏の「解釈」を示してあまりないものであるが、その第三分冊は、その表題——「第三篇、歴史的・論理的」——が示しているごとく、もっぱら、「歴史的・論理的」に捧げられており、その「第三章、歴史的・論理的、その二」の「六、市場価値」の中に、われわれは、つぎのごとき「説明」を見出すことができる。

「いま次のような状態を仮定しよう。ここでは、極めて大量の商品が、ほぼ同じ生産諸条件のもとに生産されるのであるから、これらの商品の個別的価値は等しい。これらの商品が、等しく社会的に平均された中位の条件の下で生産されているからである。かくして極めて少量の商品のみが、この中位的なものよりすぐれており、他の極めて

少量の商品のみが、この中位的なものに劣っているであろう。この商品が、この最劣等の生産諸条件をもって生産された商品の価値で売られようとしても、これは許されない。何故かというに、他のこの商品よりもっとすぐれた条件をもった同一商品は、これ以下で売ることができ、この価値で決定された価格を直に押し下げるからである。ヨリ有利な諸条件をもつ商品生産者は、極めて低価格でこの商品を売りうるであろうが、これでは需要を満足させることができず、価格は騰貴して、結局この部門の全商品に対して需要の有するかぎり、大多数を占める中位的な生産諸条件で生産される商品の個別的価値に落つき、この価値をもって売られるであろう。

したがって、（!?）両極にある生産諸条件の商品の個別的価値は、中位的価値に均衡化することになる。そのために、（!?）、この商品の市場価値は、中位的な諸条件の下で生産された商品の価値によって決定される。上の極にある商品は、その個別的価値以上に売られ、下の極にある商品は、その個別的価値以下に売られる。しかし、この生産部門全体において支出された労働は、平均化されて、過不足がない。かかる平均化された労働は、その生産部門で支出された全労働によって構成されるものである。このように、価値を決定する社会的労働は、他の条件を別とすれば、生産者の生産諸条件に対する競争によって、平均化の傾向をすすめられる。かくしてのみ、価値決定労働として考えられたものが具体的にはつくられて行く。……

次のような場合も考えられる。すなわち、市場に出まわる商品の総量と需要との関係は不変であっても、中位的条件の商品でなく、最も劣等な条件をもつ商品が、この商品総量の中で相対的に多量を占めている場合である。この商品の供給量は、需要に對して必要なものであるから、この商品の市場価値決定には、この相対的に多量な劣等な条件をもつ商品の個別的価値が決定的に重要である。最も優良なる生産条件をもつ商品と中位的なそれをもつ商品

どの価格に對する圧迫があり、平均作用は行われるのであるから、最劣等の生産諸条件そのもので、市場価格が決定されることはない。しかし、この場合の市場価値は、この最劣等の諸条件をもつ商品の個別的価値に極めて近く決定され、この場合の市場調節的な価値は、かかる個別的価値であるということが出来る。ここでは、この価値以下の価値をもつ、中位的諸条件及び最優良なる諸条件の諸商品の生産者は、やはり特別剰余価値を獲得することできる。(前出一八二—一八四ページ、傍点および(!?)—山本)

一見して、さきに検討した宇野氏の、所論と同じく、市場価値と市場価格との「混同」ないしは、市場価格による市場価値の「すりかえ」は明瞭である。いま、これを、個々の文章について、簡単に吟味してみることにしよう。

(1)「この商品が、この最劣等の生産諸条件をもつて生産された商品の価値で売られようとしても、これは許されない。何故かというに、他のこの商品よりもっとすぐれた条件をもつた同一商品は、これ以下に売ることができ、この価値で決定された価格を直し下げるからである。ヨリ有利な諸条件をもつ商品生産者は、極めて低価格でこの商品売りうるであろうが、これでは需要を満足させることができず、価格は騰貴して、結局この部門の全商品に對して、需要が存するかぎり、大多数を占める中位的な生産諸条件で生産される商品の個別的価値に落つき、この価値をもって売られるであろう」(傍點—山本)。

ここに長々と述べられているのは、いったい、何の「説明」であるか？ 市場価値決定についての「説明」であるか？ とんでもない！ ここに述べられていることは、資本主義社会に住んでいる人ならば誰でも良く知っているまったく常識的な事柄、すなわち、「商品の販売価格が競争によってきまる」ということだけである。向坂氏は、商品の販売価格が「大多数を占める中位的な生産諸条件で生産される商品の個別的価値に落つ」くような例を示したにす

ぎぬ。しかも、右のごとき、判りきった当り前のことを「説明」するのに、「この部門の全商品に対して需要が存するかぎり」という「但し書」をあえて付されたものである。だが、この「但し書」は、少しく立ち入って考えれば、マルクスも述べているごとく、拙劣なトウトロギーにすぎないようである。なぜならば、需要というのは、抽象的にあるいは一般的にあるのではなくて、具体的に、いいかえれば、一定の販売価格についてあるものだからである。要するに、ここでの「説明」は競争によって、販売価格または市場価格がきまるといふだけのことである。

ところが、右のごとき判りきった当り前のことから、向坂氏は、突如として、市場価値決定の「結論」をひき出されるのである。

(2)「したがって、両極にある生産諸条件の商品の個別的価値は、中位的価値に均衡化することになる」(傍點—山本)

(1)において述べられたのは、販売価格が競争によってきまること、したがって、それぞれ異なる個別的価値のいづれに落付くかということであって、個別的価値と販売価格（または市場価格）とはまったく異ったものであり、しかも、販売価格（または市場価格）がある個別的価値に落付いたとしても、他の個別的価値はこれによってなら変更を蒙るものではない。ところが、向坂氏は、「したがって」というような、まったく見当ちがいの言葉を挿入して、「個別的価値」が「中位的価値に均衡化する」と云われるのである。このように、ここには、販売価格（または市場価格）と中位的価値との「混同」があるというより、むしろ、論理を超越した「すりかえ」が見られるのである。そして、ただひとえに、このような簡單明瞭な「すりかえ」によって、市場価値まで一挙に片付けられるのである。

(3)「このために、この商品の市場価値は、中位的な諸条件の下で生産された商品の価値によって決定される」(傍

點——山本。

この「そのため」という言葉が、論理的にいつて、いかような「意味」をもちうるか、けだし、当の向坂氏自身を措いてはこれを「判読」しうるものはないであろう。(1)と(3)とでは、事態は、向坂氏の「説明」とは完全に反対のものとなっているのである。「そのため」どころではなく、むしろ逆に、(1)と離れて、それ以前に、まず、供給Ⅱ生産の側において「組合せ」により、社会的需要量のいかんにかかわらず、「売れる、売れない」にかかわらず、市場価値が決定される。そしてつぎに、かくして一定の市場価値をもつ商品が市場において社会的需要に対比されることになり、「社会的需要量」、したがってまた「売れる、売れない」が問題となり、これによって、市場価格の決定、したがってまた、市場価値からどれだけ離れて市場価格がきめられるかということ——がおこなわれるのである。販売価格が市場価値から離れ、したがって、どの個別的価値に落付くかということは市場価値決定の後に来る問題である。それゆえ、(3)のつぎに(1)の「説明」が置かれるべきであって、向坂氏の論法は、まさに顛倒したものであるべきである。

(4)「上の極にある商品はその個別的価値以上に売られ、下の極にある商品はその個別的価値以下に売られる。しかし、この生産部門全体において支出された労働は平均化されて、過不足がない、かかる平均化された労働は、その生産部門で支出された全労働によって構成されるものである。このように、価値を決定する社会的労働は、他の条件を別とすれば、生産者の生産諸条件に対する競争によって、平均化の傾向をすすめられる。かくしてのみ、価値決定労働として考えられたものが具体的にはつくられて行く」(傍點——山本)。

ここでも、向坂氏独特の「用語法」がまず注意されなければならない。ここで氏のいわれる「平均化」とは「上の

極にある商品がその個別的価値以上に売られ、下の極にある商品がその個別的価値に売られる」という事情を指しているものではない。いいかえれば、販売価格（または市場価格）と個別的価値との差額が、この場合にかぎり、全体としてプラスマイナス零、すなわち相殺される、ということだけである。だが、このように都合のよい場合、市場価値と市場価格とが一致する場合——はきわめて稀であり、むしろ販売価格は、たえず市場価値の上または下に離れて変動しているのである。それゆえ、一般的に考えても、また現実的にみても、販売価格（または市場価格）と個別的価値との差額がプラスマイナス零となることは、ありえない。向坂氏が「この生産部門全体において支出された労働が、平均化されて過不足がない」といわれるのは「売られる」ということを主眼として考えるかぎり、すなわち販売価格（または市場価格）についてみた場合、まったくあり得ないことなのである。「平均化」が行われて「過不足がない」のは、市場価値について見た場合のみである。さらにまた「価値を決定する社会的労働」なるものは、「生産者の生産諸条件に対する競争によって」はじめて「平均化の傾向をすすめられる」ものであろうか？ この場合、向坂氏が、「平均化」という言葉を濫用し、誤用していることは明らかである。そもそも「価値を決定する社会的労働」とは何か？ 「価値を決定する社会的労働」は、このような「平均化」を「すすめられるもの」でもなく、また、いかに、に、「具体的につくられて行く」ものでもない。「個別的価値」という言葉は、そもそも何を指しているものであろうか？ 「価値を決定する社会的労働」なくして、したがってまた、本来の意味における「労働の平均化」なくして、どこに「個別的価値」なるものが存在しうるであろうか？ 「価値決定労働」がはじめにあって、これによって各異れる「個別的価値」が生じ、これら「各異れる個別的価値」の「平均化」、いいかえれば「組合せ」によってはじめて「市場価値」が成り立つのである。そしてかようにして一定の市場価値をもつ商品が、市場において社会

的需要に対応せしめられ、市場価格の決定、したがってまた市場価値からの市場価格の諸背離が生じるのである。向坂氏が、市場価値と市場価格との「混同」ないしは「すりかえ」の上に、さらに「平均化」あるいは「価値決定労働」にたいする誤解ないしは歪曲をあえてしていられるが、これは、のちに見るごとく、氏が、第一巻における価値規定の内容と、第三巻における市場価値規定の内容とを無原則的に「混同」し、結局「混乱」に陥っていられることによるものである。

(5)「この商品の供給量は、需要に、対して、必要なのであるから、この商品の市場価値決定には、この相対的に多量な劣悪な条件をもつ商品の個別的価値が決定的に重要である。最も優良なる生産条件をもつ商品と中位的なそれをもつ商品との価格に対する圧迫があり、平均作用は行われるのであるから、最劣等の生産諸条件そのもので、市場価格が決定されることはない」(傍點山本)。

見られるとおり、「需要に対して必要であるから」、商品の市場価値決定には「決定的に重要である」、「需要に対して必要の度が異れば」、市場価値決定はこれと異らざるをえない、——市場価値決定にとって、「需要」はかくも「決定的に重要な」役割を果すことになっているのである。このような、市場価値と市場価格との直接的「混同」は「市場価格が決定されることはない」という一語で、まぎれもなく暴露されている。

向坂氏が「需要供給の關係」にたいして、市場価値決定上、「決定的な意義」を賦与されていることは、つぎのいとき所論の中にも端的に示されている。

「個別的価値は、種々なる生産条件のもとで生産されている。従って、ある個別的価値は、市場価値以下であり、ある個別的価値は、平均価値以下であるだろう。先にのべたように、最も有利な生産諸条件をもって生産された諸

商品、又は最も不利な生産諸条件をもつ諸商品によって市場価値が規制されるということは、特殊な需要供給の存する場合にのみ行われるのであるから、原則として、中位的な生産諸条件をもって生産される商品が、当該生産部門における商品量中の大半を占め、これによって市場価値が規制されるものと考えられる」(前出、一八八ページ、傍点—山本)。

見られるとおり、「特殊な需要供給」があれば、市場価値は「原則」とは異って、決定される、と主張されている。われわれはここに、宇野氏の所論におけるよりも、より明確に、「折衷説」および「需要説」の典型的表現を見出すことができるのである、——「特殊な需要供給」と「原則」との、一種特殊な「結びつけ」を。(註)

(注) 向坂氏はまた、他の場所においては「需要説」的「解釈」を排してマルクス流の説明を与えようとされている——曰く「が、他方において、生産上の諸事情が異常な結合を見せているような場合でなければ、最も有利な条件、または最も不利な条件の下において生産された諸商品によって、市場価値が規制されることはない……」(前出、一一六ページ、傍点—山本)。

ただし、右にいう「異常な結合」が「組合せ」を指すものかどうかは明確にされていない。

ところで向坂氏が、クーゲルマン宛てのマルクスの手紙を「論拠」として、価値法則をば「社会的総労働の配分を規制する法則であるとし、また「資本主義社会の基本的運動法則」(前出、一七五ページ、傍点—山本)と規定されていることは、すでに前稿(交換価値と価値)において詳細に検討したとおりであるが、このような、誤謬にもとづく価値法則の曲解は、社会主義社会における価値法則の問題に照らしてこれを吟味するとき、明白なものとなる。社会主義社会における価値法則の問題についての検討はちかく行論において展開されるところであるが、ここでは、一貫して「歴史的、論理的」を呼号される向坂氏が、この問題について、いかに「非歴史的、非論理的」見地に終始されているかということだけを簡単に指摘しておきたい。いま、一例として、向坂氏の所論のうちからつぎの一節を引いて挙げておこう。

「マルクスにおける価値論は、資本主義社会の経済的運動法則を明かにするにある。単に価格を説明しようとするものではない。価格の成立を可能にする価値は、実は資本主義社会の運動法則の基本的なものである。何故に、かかる基本的運動法則が

価値法則という形態をとるかということは、この社会自身の性質によるのである。即ち、価値法則とは、社会の発展を規定する運動法則の特殊資本主義的な形態に外ならない。したがって、社会の根本的運動法則は、常に価値という形態で現われるものではない。価値法則は、資本主義社会、ヨリ正確にいえば、一般に商品生産の社会に現われるものである。社会主義社会にもかかる運動法則は存するのであるが、その社会が完成されるにしたがって、これは価値法則として現われることはない。だから、もし仮りに人の言うようにソ連邦の社会主義社会になお価値法則が存するならば、社会主義社会の計画性がまだ未成熟であることからくるに外ならない。即ち、計画性を阻害する商品生産的要素が存在しているだけのことである。私は、ソ連邦が極めて困難な事情の下に社会主義的計画性を前進させ得ていることを認めることに吝なものではない。あのような困難な事情の下に、社会主義社会の建設を開始したのであるから、なおかの国に非計画性が多分に存在し、価値法則に規制されるものが残存しても、おかしいことではなく、このことによって人々の努力が過少評価されるべきものではない。事実を率直に認めないで、何かと言いくるめようとする垂流的態度こそはすべきことである」(向坂氏論文、「市場価値論と相対的剰余価値論」、有沢・宇野・向坂編「マルクス経済学の研究」大内兵衛先生還暦記念論文集(上)所收、七二―七三ページ、傍点―山本)。

見られるとおり、向坂氏の「歴史的、論理的」はまことにすばらしいものがあるようであるが、まず、その「論理的」のエッセンスをつぎに摘記することにしよう。

(1)「価値法則は、資本主義社会の基本的運動法則である」、「価値法則は、社会発展を規定する運動法則の特殊資本主義的形態にはかならない」↑↑「社会主義社会にも、かかる運動法則は存する」。

ここに見られるのは、生産様式の区別にかんする完全な無知と無関心、「社会の運動法則」という文字についての、内容空疎な「論理的遊戯」、総じて、社会主義社会についての完全な無理解の露呈にはかならない。

(2)「社会主義社会にも、かかる運動法則は存する」↑↓「もし仮りに人の言うようにソ連邦の社会主義社会になお価値法則が存するならば」、「社会主義社会の計画性がまだ未成熟であることからくるに外ならない」。

自分で、「かかる運動法則が存する」と述べることは、いささかもお構いなし。ただし、人が、かりにも同じことを口に出して言うならば、「価値法則の存在」は突如として、「計画性の未成熟」に「転変」してしまう。この「転変」の経緯については、「理論的」に説明されているものではなく、いっさいが、「価値法則は社会の運動法則である」との一句によって片づ

けられるべき運命にある。

(3) 「特殊資本主義的な形態」 \leftrightarrow 「計画性を阻害する商品生産的要素の存在」。

「商品生産的要素」と「特殊資本主義的な形態」との間には、本質的差違の存することぐらい、社会主義社会について完全に無知であっても、資本主義社会の「運動法則」についてはの少し知っているだけで、充分判るはずである。この「論理的」「矛盾」は、いかなる「論理」によっても抹殺されえないであらう。

総じて、向坂氏は、疑いもなく、ソ連邦の「困難な事情」を「認めることには吝なものではない」が、しかし、氏の「歴史的」が当然要請して止まない筈の、ソ同盟における社会主義建設の歴史的発展の究明には、完全に吝なものであるようである。ソ同盟の現実的、歴史的発展は、価値法則が「非計画性」にもとづくものではなく、むしろ、「計画性」と並存し、「計画性」に役立てられ、これと相互に制約し合ってきたものであることを実証しているのである。経済理論は、要するに、現実の社会の歴史的発展の観念的反映にすぎないのであって、社会主義経済理論は、資本主義社会の学者の書齋の中で「資本論」の「解釈」をもととしてひねくり出されるものでは決してない筈である。それは、ソ同盟においてレーニン・スターリンによって率いられた共産党を前衛として数千万の勤労大衆が現に築き上げてきた社会経済的発展の歴史的過程を一般化したものであり、なによりもまず、現実の社会主義的生産様式の規定を基本として成り立っているものである。このいづれについてもその事実について深く究明することを避け、もっぱら、「あのような困難な事情」という言葉を——いかなる困難がいかにして生じ、またそれがいかにして克服されたか、それによって社会主義建設の具体的発展がそのときいかに影響を受けたか、等々についてはいっさいお構いなく——ひとつ覚えにくりかえし、「非計画性」の一語にしがみついて——いかなる「非計画性」が、何故に、いかようにあらわれ、いかにして克服されたかを、社会主義建設の発展過程に結びつけて究明しようともせず、戦時共産主義時代の「非計画性」も今日の「非計画性」もごたまたまにするだけで——きわめて現実的な価値法則の問題を「片づけよう」とする者こそ、まことに、「事実を率直に認めようとししないで、何かと言いくるめようとする」ところの、ブルジョア経済学者への「垂流的態度」に堕したもののといふべきである。

このような、「非論理的、非歴史的」をきわだつた特徴とする向坂氏の所論は、かのスターリン論文によってその本質を根本的に暴露されたはずであるにもかかわらず、この当の向坂氏によって、ほかならぬソヴェト研究専門家と目される副島種典

氏が、再度にわたって批判を蒙ったのは、まことに奇異な感じを与えるものである。しかも、向坂氏は、かのスターリン論文に「依拠」しつつ、この種の批判をおこなっているのである。(たとえば、「経済評論」一九五三年七月号所載、向坂氏論文「単純なる商品について」、および同誌一九五三年八月号所載、同氏論文、「価値法則と社会主義」)。

だが、一見奇異に思われるこの現象も、副島氏自身の論ぜられるところをみれば、また一種当然のこのようにも考えられるのである。副島氏の理論的水準そのものは、たとえば、価値法則に坎するつぎのごとき主張の中に端的に表明されているのである。すなわち、去る一九五一年五月世界経済調査会(東京)において開かれた国際経済学会第三回研究報告会の席上、副島氏は、気賀健三著「ソヴェト計画経済論」にたいする批判をもって進出されたのであるが、その報告についての質疑応答にさいして、ソヴェトにおける価値法則をば、およそつぎのように「説明」されたものである。

「たとえば、木材加工業において机と椅子とがそれぞれ対をなして生産されなければならないのに、その方がより多く利益があると思えば、ある工場では机ばかりをつくる。他の工場では椅子ばかりつくるということになり、計画的な生産が阻害されてしまうことになる。このようなことが、いわゆる価値法則の作用である」と。

このような「説明」をもって価値法則の説明であると云い、るところに、問題はあるのである。わたくしは、ただちにこの「説明」にたいして、それは価値法則——あるいは、その作用——の説明どころではなく、たんに、ソヴェト同盟に残存する資本主義的残滓(ことにこの場合には、精神的のそれ)によって計画的生産が阻害されうることとを述べただけのことであると、反駁したのであるが、このような反駁は氏によってきわめて簡単に、たんに「見解の相違」として、拒否されてしまったのである。このような、価値法則そのもの、およびソ同盟における社会主義経済についての全き没理解が、ソ同盟における当時の一思潮たる「価値法則変形論」と容易に結びつき、これを受け容れたことは、もとより当然のことといふべきである。一九五二年十一月京都大学において開かれた国際経済学会秋季総会は、すでにスターリン論文の公表後のことであり、わがソヴェト研究専門家、副島氏は、たんにスターリン論文の「解説者」をもって進出し、ソ同盟における「価値法則変形論」がいかに誤まったものであり、スターリン論文によっていかに徹底的に論破されたかを「説明」されたのであるが、氏の持論についての反省はまったく見られず、氏の「価値法則」についての無理解を指摘したわたくしの反駁にたいしても、同じく「見解の相違」とわたくしの側における「ソ同盟の実状についての無知」という二つによって片附けられたのである。

要するに、副島氏における「価値法則の作用」したがってまた「価値法則」そのものについての従来からの理解は、向坂氏のそれとまったく同一であり、両氏とも「価値法則の作用」と「非計画的性」とを同一視しているものである。この種の同一視ほど、論理的混乱、理論的混乱およびソ同盟社会主義経済にたいする無知を明確に表白しているものではないのであって、この種の同一視を公表された二理論家が、相互に相手方の「弱点」あるいは「欠陥」を指摘し合うことほど、また易しいことはないのである。この種の同一視は、宇野氏もまたこれに与っているところ少なく、かくして、三氏ともに同一水準の上に立って「論議」をまじえ、スターリン論文の「解釈」を競い合っているのは、まことにものとものことといわなければならないのである。

ソ同盟内部においてスターリン論文が果たした画期的意義、およびそれがまた国際的に、——とりわけ、副島氏その他の亜流「価値法則変形論」が支配していたわが国経済学界において——いかなる意味をもち、いかなる影響を与えたかということは行論において検討されるところであり、また、そのさい、スターリン論文の公表を契機として、右のごとき諸理論家がいかにこれを「援用」し、またいかに「自己批判」したか、という経緯もとくと吟味されるはずである。

ここにくりかえして強調しておきたいのは、「資本論」その他に展開された科学的基礎理論を正確に把握すること、ソ同盟における社会主義建設の歴史的発展過程をば、生産諸関係の変化に発展を中心として具体的に考察し、基礎理論の発展および具体化につとめること、——これである。これによってのみ、はじめて「歴史的・論理的」の統一的把握が可能なものとなるのである。

いたずらに「無計画性」とか「資本主義の残滓」一般を念佛のごとくくりかえし、「困難な事情」に「同情」を示すことによって、自己の「理論的見地」の「高さ」を誇示することよりも、現実にあるソ同盟について、大十月革命以後、「価値法則」が具体的にどのような形で「行われてきた」か、また社会主義建設の過程において——とくに計画的生産にとって——「価値法則」がどのような形で「利用」されてきたか、また「利用」されざるをえなかったかを実証的に示すべきであり、そしてまた、もし向坂氏のごとく「価値法則」をもって「資本主義の基本的運動法則」となし、あるいは「無計画性」と解するならば、現実の歴史的発展をとげてきた社会主義建設および計画的生産は、何によって可能とされたか、ということ、ソ同盟の歴史的事実によって具体的に説明してもらいたいものである。このような、およそ経済理論家として当然解決すべき問題が――

——その輪廓だけでも——解明されえた場合に——そのときにはじめて、「価値法則」がはたして「資本主義の基本的運動法則」であるか、あるいは「無計画性」であるか、正当に判断できるのであって、このような判断は、他の好きな人々に任しておいて然るべきなのである。問題は社会主義社会における「価値法則」についての「歴史的・論理的」解明にこそあるのである。

「歴史的・論理的」を看板とする理論家は、どうか、急いで、この緊急の課題をとり上げて、答えてもらいたいものである。なお、ついでながら賢明なる読者諸氏には、たとえばソ同盟における「ループリによる統制」という歴史的事実が、「価値法則」をもって「無計画性」あるいは「資本主義の基本的運動法則」としか「理解」できないような「理論家たち」にとって、はたしてどのように「説明」されることができるといふことを、こころみに推量していただきたい。さすれば、眞理はいづれの側にあるか、すなわち、社会主義建設を最後まで指導した人々の側にあるか、はたまたわが国における「資本論」「解釈」学者の側にあるかも、おのづから明白となるであろう。ここにいたって、われわれが、かのスターリンの予言的至言——「ベチカの上に寝そべって後生大事に『資本論』ばかりひねり回し、十年、二十年後の、はたまた遠い将来の現実的な問題にたいするでき上った解答を『資本論』の中に見出そうとする連中」——を想起するのは、はたして唐突きわまることとして片づけられるべきであらうか。

x

x

x

x

以上長々とこころみてきた第三卷第十章におけるいわゆる「不明瞭な箇処」についての検討を通じて、われわれは一方において、理論把握にとって論理的一貫性が第一の不可欠の要件であることを重ねて教えられるとともに、他方において、とくに価値理論の究明においては市場価値論の意義を明確にすること、いいかえれば、第一巻における価値規定の内容と第三巻における市場価値規定との内容との内面的関連を明確ならしめることが、当面決定的な重要性をもっているものであることを教えられるのである。「技術説」的解釈といい、「折衷説」あるいは「需要供給説」といい、いづれも、右のごとき内面的関連の明確な把握に欠けているのであって、このために、たんに「不明瞭な箇

処」を明確ならしめることができないばかりか、種々様々の理論的、あるいは論理的誤謬を重ねることになっているのである。

第一巻における価値規定の内容と第三巻における市場価値規定の内容との内面的関連を明らかにすることは、同時にマルクスの経済理論にとつての価値理論の意義をも一般的に明確ならしめるものであって、これにより、資本主義社会における価値法則の問題は根本的に解明されうる基礎がえられるのである。本稿につづく「市場価格と市場価値(五)」が、「市場価値論」の「位置づけ」に充てられているのは、この理由によるものである。

(おことわり) さきに前稿「市場価格と市場価値(三)」において、その冒頭に目次にかかげ、これに附随して、「したがって次号においても標題は本号と同じく『市場価格と市場価値(三)』とされるはずであると断わり書をしておいたのであるが、本稿もきわめて長いものとなり、第三節のみを論究するだけで紙数が予想外に長いものとなつてしまつたので、前号における右のごとき断わりがきにもかかわらず、第三節に充てられた本号の部分の標題をば「市場価格と市場(四)」と附けざるをえない次第となり、したがってまた、第四節に充てられた次号の部分には「市場価格と市場価値(五)」という標題が附けられることとなつた。また、前号論文の冒頭にかかげた目次の中に見当らない「小節——「五、『折衷説』的、あるいは『需要供給説』的説明の一、二の例について」——が挿入されるにいたつたのも、同じく右の事情によるものである。論文が長大なものになつたことと併せて、以上、読者諸氏の御諒承を得ておきたいと思う。